

自むく等のむくも准へて知べし。鳥の瀧櫛^{フサツ}は生毛^{ウツブ}にて、ふりき毛の謂なれば別也。混ふべからず。是又かの書中にことわりつ。

○さんむく 「さんむく」を見よ。

くノ部

○くまだつ 壅立也。夫木十六、冬、隆房「つ
のくにのこやはなにゝかかくるらんくきのみ見ゆる
霜がれのあし」

○くさぬき 今俗に城の壁に四角なる穴ある
を、くさぬきといふ。又それを紋に附たるをも、くさ
ぬきと云り。こは釘貫の義にて、工匠の大釘貫とい
ふ具に、鐵の四角なるに打かねを入れ、抜物ある其
形に似だるを以て云出たるならん。又關のくさぬき
といふは、荒垣ともよみて、棚を結廻らしたる構へ
の中に、旅人をまとめて通す木戸ある故に云て、漏
抜の意なり。此事は既に鐘の響にもいひ、又雅言部
にも委しかれば省けり。

○くやつ 魁儡也。隆信集下、くやつによする
戀^{ハシマム}にうつる心もかゝみ山影みぬ人をこふ

るものかは」六百番歌合にも寄傀儡戀あり。續詞花
雜下、傀儡にかはりて、能因「いづこともさだめぬ
ものは身なりけり人のこゝろをやどらするまに」千
賀屋草五云「和歌の題に傀儡と書て、くやつとよみ、
遊女の事とす。こは、人形舞しの事なるべきに、何
とて遊女の事に混じけんとおもひしに、攝津國西宮
より人形舞、世間をめぐりはじめて、遊女の形を
第一に立てつかふ。知ぬ是より轉じ來れると見えた
り」とあり。さる事にてもあるか。されど遊行女婦
舟の上のあそびめなどを云ることはなくして、たゞ
驛路岸頭の賤き賣婦を云るは、かの草船の何となく
嫌はずとり入るゝに譬へたる詞にはあらじ歟。其心
ばへ傀儡子の箱と、もはら同じかれば也。

○くやつ くごなは 万葉三^{三十}に「しほひの三
津之海女^{ノミコト}の久具都持玉藻かるらんいざゆきてみん」
空穗^{さがの院中} 古本吹上、「中納言はきぬあやをいとのくやつ
にいれて」枕冊子^{トリモト}と/orもてる物「くやつのことり」袖中
二十二世に「くやつめと申は、さやうの龍の目のつま
りたるを云に」若冲万葉類林云「袖中抄に「裏類貝」

一條あり。短席とす。又飯包苞せり云々」其草にて
あみたる裏やうのものをくゞつといふ事は、薦にて編たる、席と云が如し。寺田氏云「口沓の義歟。
喰取惡き牛馬には、細繩にて沓の形したる物を作りて口にかくる也」玉勝間七云「豊後國人のかたりけるは、ふぐしと云物今も我國にありて用る也。くいづもあり。くゞと云繩してくみて、小道具など入る物也。とかたりき」今按に、江戸にてくご繩と云あり。その事なるべし。是即若冲の引る、源氏抄に云る草也。もしこれらによらばその草して編たるにて、名義はくゞ綬の意にやあらん。袖中抄に云る所は竹器のさま也。後には竹もて作りたるをも其名もてよびたる歟。

○くゞばり 句配也。言塵集序「此文字くゞばりきゝよしとて」

○くゞむる 雀の子に餌をくゞむるなど云り。枕冊子に「うづくしきもの」「もてきてくゞむるもの」とらうたし

○くゞる 括也。万葉十一丁に「しら玉をあひだあけつゝ貫る緒も縛ればのちあふものを」又四十

「玉緒之久栗緣乍」十三廿「緒の絶ねればくゞりつゝ又もあふといへ」

○くゞる 漏也。万葉四十五「枕從久々流涙にぞ」十四三十「伊波具久流水都爾母ノモがもよ」夫木七、信實「かどさせる卯の花垣をわがためとくゞりいりても夏は來にけり」

○くごなは 「くゞつ」を見よ。

○くこん 九獻也。海人藻芥下云「後光嚴院御愛酒ニテ御座ケル程ニ、常ニ御酒宴有テ、數獻ニ及ブト云々。其御代ヨリ數獻加増シテ、或ハ五獻七獻マデ被召タリ。依テ近比ハ酒ノ名ヲ九獻トゾ申合ケル云々」又數獻と云詞は徒然草下七十九段に「心よく數獻におよびて興にいられ侍りき云々」或人云「酒を九獻ト云ニト、皇朝ノコトニハ非ズ。潛確類書云「九獻宗廟之祭具九獻之禮」トアリ」といへり。

○某ぐさ 今世に「わらひぐさ」「かたらひぐさ」「めざましぐさ」など云、是も古き事にて、いにしへは廣くいろへに云り。先づ万葉十二二十「あかときの目不醉草跡」同十七長歌「よろづ世の可多良比具佐」と、いまだ見ぬ人にも告ん」源氏、紅葉賀、お

「としめぐさ」同梅枝^廿、「なげきぐさ」同若紫、「かしづきぐさ」とおぼいたり^{紫上}、同薄雲「明くれのかしづきぐさをさへはなれ聞えて」^{子を}同みをつくし「さうくしきにかしづきぐさにこそとおぼしなる」同藤衣「御なげきぐさのみしきりそふ」同須磨「かつは物思ひのもよほしぐさなり」^{五十}、^{四十}、^{三十}、^{二十}、^{一十}「そしりぐさ」四季物語^{二月}「人の心をとるへつらひぐさに」同五月「改りたることぶきぐさけふあらたなるべし」同九月「つぶやきぐさ」増鏡序「人のもてあつかひぐさ」になれるは「今昔廿八^{三十}」「間繼て世の中の咲種ニシ」盛衰記廿六「百ニ一モ世ニニルコトモアラバ、カコチグサニモシ」など云る類ひなり。是に准へば「おもひぐさ」「ことなしぐさ」の類ひも、同例の詞なるべし。六帖戀「秋の野の尾花がもとのおもひぐさ今更何のものかおもはん」後撰戀五「おもはんとわれをたのめしことのははわすれぐさとぞ今はなるらし」^(是は草花を指るにはあらず)同雜上「かざすともたちとたちなんなき名をばことなし草のかひやなから

ん」「いつ迄ぐさ」も此類歟「戀ぐさ」「つれつれ草」は正しく詞なり。

○草市 朝市

温故古名跡志一云「七月十三

日、生靈の供物、青物、くだ物、あるひは器物等の朝市、江府諸方五十三町の間に立」と見ゆ。續江戸砂子これに同じ。今は其數知べからず。

○くさかり

體言にて草刈童をさす。爲忠朝臣

集「じげりける夏の大野の草刈は水入にひとし見えつかくれづ」

○くさかり笛

わらはごえ 手つゝみ 夫

木卅五雜、中務のみこ「日ぐれぬと山路をいそぐうなゐこが草かりぶえのこえぞさびしき」又卅二、信實「みまきの草かりぶえのわらは聲あなかまとのみよそへてぞきく」空穂、藤原君^{四十一}「うしかひども手つゝみどもうちて草かり笛をふく」

○くさかれ

草枯時など云、これ也。詞花、冬、

好忠「草がれの冬まで見よと露しものおきてのこせる白菊の花」

○くさ木もなびく 空穂、俊蔭「たまくき、つくるけだもの、たやこのあたりにあつまりて、あ

はれみの心をなして、草木もなびく中に、尾ひとつをこえていかめしき女猿、子ども多くひきつれてきて」

○くさざる　字鏡に「耘除草也。鋤也。久佐支留」とあり。漢籍の訓のみにはあらで、古くは常にものいひし詞なるべし。

○くさすまふ　草相撲也。古くはくさあはせと云り。和多抄云「鬪草。荆楚歲時記云。五月五日有鬪草之戲。上鬪草此間云。久佐阿波世」躬恒集「くさあはせをする所」野守鏡序「いまだいとけなくして、くさをたかひ、ちりをもてあそびしより」

○くさだ　穗先　草田也。今もゐなかにてもはら云。夫木十二、秋、衣笠内大臣「露おつる草田のほさきうちなびき朝ふく風は袖ぞさむけき」曾根好忠集、十一月中「いはまには水のくさび打てけりもりこし水も絶ておとせず」堀川百首、匡房「河ごしのしばつみ車いかすする氷のくさび冬はたえせじ」新撰六帖一、爲家「冬きては田川にたてる水車こほりのくさび打そへてけり」夫

木卅六雜、高遠「なる瀧のおちくる水の音なきは水のくさびさしてけるかな」

○くさもち　草のもちひと云べきを、世俗の云ざまに擬ふ也。三月三日東國にて、蓬の葉を取て蒸し、餅に調するを草餅と云。いにしへは母子を用ひし事、諸書に見ゆ。今も京師にては、母子を用ふとぞ。和名抄に「饅亦作餉。久佐毛知比」は、こは「菴蘆子。波い古」と見ゆ。文德實錄「嘉祥三年五月辛巳。嵯峨太皇大后崩。壬午葬太皇大后于深谷山。遺言令薄葬不營山陵。先是民間訛言云。今茲三月不可造饅。以母子也。識者聞而惡之。至三月三日宮車晏駕。是月亦有大后山陵之事。其無母子。遂如訛言。此間田野有草。俗名母子草。二月始生莖葉白脆。毎屬三月三日婦女採之。蒸搗以爲饅。傳爲歲事。今年此草非不繁。生民之訛言天假其口云々」拾芥抄云「三月三日草餅何。昔周幽王淫亂群臣愁苦。于時設河上曲水宴。或人作草餅貢幽王。王嘗其味爲美也。王云。是餅珍物也。可獻宗廟。周世大治。遂致太平。後人相傳作草餅。三月三日進于祖靈。草餅之興從此始云々」落窓一之上「草もちひく

さ、ちひさやかにをかしうて、さまぐなり」後拾遺、俳諧、定方朝臣「みかの夜のもちひはくはじわづらはしきけばよど野には、こつむなり」曾丹集、三月上「は、こつむやよひの月になりにけりひらけぬらしなわがやどの桃」散木集「君がためやよひになればよつまさへあへの市路には、こつむなり」本草に、鼠麴草とも、佛耳草ともみゆ。今の俗、四月八日釋迦佛誕生會に、草餅をつくりて奠るは、相混じたるもの也。

○くさる 堀川百首、仲實「神山のその、葵をくさりつゝけふのみあれにかざしつるかな」くさるは匂ぐさり又鎌を云も、綴て造るものなるより云。今も「糸をくさる」「紐をくさる」など云は此語也。

○くされつく 一かたに腐つくなど云て、偏固の事也。是は續紀十九詔詞に「惡逆在奴久奈多夫禮」などある久奈、又中古の言にくねくしなど云るくねにて、かたよりてとけぬを云。これらの奈と多と通ふ例は、いただきをいなだき、わなくをわたくし、たゞしれをたなしれといへる類也。

○くされ女 宇治拾遺七「かのくさり女が」、

○くじ 九字也。後世九字とて、縦横に九行づくものは、六甲秘呪ミツヅクヒヅクとて、道家の邪魅を避る呪也。抱朴子に「臨兵リンヘイ闖トウ者シヤ皆陳列カイシラツ前行ゼンジン」の九字を配當せり。はやく萩生氏の云る如く、皆鬪戰の語にして、釋氏には可、忌字どもなるに、祈禱僧の専ら用るは似合しからぬわざなり。

○くじ 團也。増鏡三神山「やがて神事はじめ、若宮の社にてくじをぞとりける」下學集に「團クヅ」とあり。此假字慥に定めがたし。さて山家下十四五丁「庚申の夜くじくばりてうたよみけるに」二條大皇大后宮大貳集「齊院にてかうしんの夜くじの御前前夜」とありて夏の夜戀をとりて」同上に庚申の「人のもとにくじのおまへの貢塵ふみの事思ひもかけず、心も得ねと云」など、あるこれらにくじよく可考。

○九十六文を百文とする事 「九十六百文の錢は、淵鑑類函、贊品類事實等に、安錄山初て百文に四文づの運土として、官庫に納んと玄宗帝に勅めしより初るとかや。皇朝にては、上杉修理大夫定政の家老長尾將監が孫、四郎左衛門景春これを初めけるよし記しつたへり」と或書にいへり。

○くじく 字鏡下に「顛五八反。屈也。斷也。久自久」とあり。今の言に「手をくじく」「足をくじく」など云もこれと同語也。

○くじのたふれ 孔子之倒也。古本義經記五、吉野落の條に辨慶が河に落し所に「あやまちは常の事、くじのたふれと申事候はずやと、狂言をぞ申ける」とある、其意を以て譬へたり。枕冊子に云る此意をもてさとるべし。莊子九「盜跖孔子與柳下季爲友。

柳下季之弟。名曰盜跖。盜跖從卒九千人。橫行天下。侵暴諸侯。穴室樞戶。驅人牛馬。取人婦女。貪得忘親。不顧父母兄弟。不祭先祖。所過之邑。大國守城。

小國入保。万民苦之云云。跖之爲人也。心如涌泉。意如飄風。強足以拒敵。辨足以飾非。順其心則喜。逆其心則怒。易辱人以言。先生必無往。孔子不聽。

顏回爲歎。子貢爲右。往見盜跖。盜跖乃方休卒徒大山之陽。膾人肝而餌之。孔子下車而前見謁者曰。魯人孔丘。聞諸軍高義。敬再拜。謁者入通。盜跖聞之大怒。目如明星。髮上指冠。曰此夫魯國之巧僞人孔丘。

非邪。爲我告之。爾作言造語妄稱文武。冠枝木之冠。帶死牛之脅。多辭繆說。不耕而食。不織而衣。搖唇怒。目如明星。髮上指冠。曰此夫魯國之巧僞人孔丘。非邪。爲我告之。爾作言造語妄稱文武。冠枝木之冠。帶死牛之脅。多辭繆說。不耕而食。不織而衣。搖唇

鼓舌擅生是非。以迷天下之主。使天下學士。不及其本。妄作孝弟。而傲偉於封侯富貴者也。子之罪大極重。疾走歸。不然我將以子肝益盡飾々之膳云々。孔子再拜趨走。出門上車。執轡三失。目芒然無見。色若死灰。據軸低頭不能出氣。歸到魯東門外云々

○櫛の齒をひくが如し 櫛は齒のしげきものなれば、使などのしげく行來するを譬へ云。文選、景福殿賦何平叔「既櫛比而攢集。又宏璉以豐斂」

○口誦 後漢書四十四楊賜傳「令措紳之徒。委伏畎畝。口誦堯舜之吉。身踏絕俗之行」

○くじる 字鏡下に「則剣同烏丸反削也。挑也。剣也。久自利嘉留」と見ゆ。今「物をくじる」と云も、是と同語にはあれど、其用ひざま少しかはれり。

○くすぬの 夫木舟一難、爲相卿「これもこのところならひとかどごとにくすてふぬのをかけかはのさと」これを見れば、掛川驛の葛布も久しきことなり。

○くすまき 山家集「すかるふすこぐれかたにのくすまきをふきうらがへすあきの夕風」此うた葛卷と體語にふへるが珍らしきなり。今葛卷と云葉子

あるは、いにしへのまがりのなごり歟。

○くすりの事 痘をさして云也。御脳の事といはんが如し。源氏若菜上「朱雀院の御くすりの事、なほたひらぎはてたまはぬによりて」同明石卷にも出づ。

○くすりの事 これは温泉をいへり。宇治拾遺六十三「信濃國つくまの湯といふ所に、よろづの人あみける藥湯あり

○くせ 堀川百首、俊頼「したひぐる戀のやつこの旅にても身のくせなれや夕とよろきは」林葉集「めもあやにさやけき月のくせなれやこよひはじめて見るこゝちする」拾玉集「人ごとにひとつのかせはあるものを我にはゆるせ敷しまの道」これは所謂、杜預左傳癖、王濟馬癖、和嶠錢癖、李帽田地癖、王福時譽兒癖、楊敬之愛士癖、陸羽玩茶癖など云ことを思へる也。白氏文集に「人皆有一癖」我癖在三章句二。

○くせ／＼し くせもの 築花月宴四「くせ／＼しからすなどして」同十二「くせ／＼しくぞおぼしおきてたりける」大鏡三「御心さまのわづらはし句二」

く、くせ／＼しきおばえまさりて云々」今按に、これらのかせは上に出せし癖の類ひにはあらず。今云癖物のかせにて、よからぬを云。盛衰記十六に云「實ニ希物癖物也」鶴の事また忍び者、盜賊等をも癖者と云ることあり。

○くせひと 宇治拾遺六廿「ゆゝしきくせ事出來るぶらはん云々」今云に同じ。くせ者のくせのごとし。

○口舌 伊勢物語に「その人のもとへいなんすなりとて、くせちいできにけり」後漢書卅五、王符傳。潛夫論浮侈篇「今人奢衣服。侈飲食事口舌。而習調欺。或以謀惡。合任爲業云々」

○くせもの 「くせ／＼し」を見よ。

○尿某 他を罵て云。今昔廿三條「大キナル屎鷄ノ翼折タル如ニ成テ、木ノ上ヨリ土ニ落テフタメク」天狗のこと也。宇治拾遺二四丁にも此詞見ゆ。華王經云「爾時會中存一居士。名曰撰擇居士云々」居士耶汝今應名屎居士也。

○某屎 こそ 昔の人の名に多く聞ゆ。こそナニシとは物の屑の義也。金屎、袂屎の類にて知べし。火

屎シツは屑スレと云にもあらざれば、火草ホクサの意にやあらん。さていにしへの童名に此言の多かりつるは、そのかみの諺に、賤き名を負せおけば、其子の壽命長しと云ことの有つる故也、といへり。さらば貴女の名に大僕オホヅボと云があると同例歟。先づ古今集の作者にくそと云あり。源氏抄に、紀貫之の童名を、内敷坊阿古屎シテと云し由云り。又同手習卷に「いつらくそたち琴とりてまわれといふに云々」また「いでとのもりのくそあづまとりこといふにも云々」空穂の中にも所々見えて、童女等を「くそたちかな」ともいへり。又大和物語にも小藥師クソトコロと云女あり。又常に某ことをいへることも、此くそを轉じたる言なるべし。空穂に「たゞこそ」今昔物語などにも童女に多く見えて「袖こそ」と云も見えたり。又古き代には、書紀にもナニカヌ某糟シテと云名多く見ゆ。是も同じ心ばへの稱なるべし。後世は書るかたにのみいへり。廣東新語曰「東莞多以「屎爲」兒女乳名。賤之所シテ以貴ヨハシタ之。男曰「屎哥」。女曰「屎妹」」とあり。かゝれば皇朝のみにもあらざりしなり。空穂、藤原君「おもしろき事のたまふくそ、たちかな」同「又この事はきやうくそたちのし給

はんことは」大和物語に「やくしくそといひける人」○くそをこく 今い俚言に屎シテと云ことあり。和名抄に「霍亂俗云。之利與利久知與利去久夜万比」とあり。然ればこくと云も古言也。

○くたびれ 草臥也。中務内侍日記「あそびくたびれ侍ると申云々」同「十三日は御くたびれにや有けん」太平記五熊野落大塔宮「すこしも草臥たる御けしきもなく」などあり。言の本はいかなる意にがあらん。或説にくたは朽也。びれはうらびれなどのびれにてひるむと同語ならんと云り。猶考ふべし。爲忠集「くたびる」旅のとまりのあかつきはそこはかとなく見けるふるごと」

○くだまく おりきり 寛平御時后宮歌合「かりがねは風をさむみやはたおりめくだまく音のきりく」とする「雁かねのくだまくおとの夜をさむみむしのおりきる衣をぞきる」ともによみ人しらずのうた也。

○くだもの 菓ダモにて木の子なりければ、田津物、畠津物の例の如くに、木津物と云意なるを、音を轉じてくだものとは云習へる也。さて後には其木

の實の代りに、糖米にて造るをも菓子と云て、くだものゝ名をも兼ける故に、立かへりて木の實の方を

ば、生くだものと云やうにはなれる也。空穂、藤原君九丁「あふちの枝ひとつに、みのなる數あり。くだものにくふによきものなり」落窓一之上「よろづにくだもの栗などかきつくるひむたり云々」又「紙をへだて、くだものからものつゝみて云々」又「親にをかしきさまならん。くだものゑぶくろしておきたまへ云々」夫木舟三雑、西行上人「をりびつに花のくだものつみてけりよしのゝ人のみやたてにして」左注云「此うたは、みやたてと申けるはしたもの、とし高く成て、さまたへなどして、ゆかりにつきてよしのにすみ侍ける、おもひかけぬやうなれども、くやうをのべんれうに、くだものを高野の山へつかはしたりけるに、花と申くだもの侍けるをみてつかはしける云々」

○くだりさか 下坂也。夫木舟三雑「しばくるまおとすみ山の谷ふかみくだりさかる身こそやしけれ」

○くだりむき 夫木舟六雑、他阿上人「おい

みの山としたかくのぱりきて、くだりむきなるさかぞするなき」

○くだりを以て天をうかゞふ 漢書、東方朔傳云

「以^レ筭闕^レ天。以^レ蠡測^レ海。以^レ筵撞^レ鐘。豈能通^ニ其

條貫^ニ考^ニ其文理^ニ發^ニ其音聲哉。繇是觀之。譬猶^ニ騎駒之襲^レ狗孤豚之咋^レ虎。至則靡耳。何功之有云々」

注師古曰「筭古管字。蠡音來爰反。瓢音頻遙反」蓮

は注に「文類曰。謂蠡筵也。師古曰。音徒丁反」

○如^レ件 古事記上「上件云々」傳三丁「上件ハ

カミノクダリと訓べし」推古紀に「初章」欽明紀に「上

件色人」大和物語に「かむのくだり啓せさせけり」

などあり。此等カミノクダリと云古言の遺りたるなり。宇治拾遺物語には「ありのくだりの事を申して心得べし。某章、某段、某條などの類、皆クダリ

と云べし。又諸文書の終に如件と書も、如^ニ上件^ニと

云ことなり。

○愚智 これはおろかなると、かしこきとを云。

愚痴とは別なり。易緯通卦驗「愚智因位。則日月無

○光

○くちあかさぬ
閉口也。源氏帝木「さえのきは、なまくのはかせはづかしく、すべてくちあかすべくなん侍らざりし云々」これ閉口の意にて、今も人に口あかさぬと云ことあり。

○くちあけ
夫木十八、冬、隆源法師「すみがまのくちや明らんをの山にけぶりのたかくたちのぼるかな」

○くちあそび
あだこと
ねごと
空穂、
藤原君「ことたはぶれごとはのたまふとも、かゝるくちあそびはさらうけたまはらじ云々」又梅の花笠に「佛の御事を、ねごとにもくちあそびにもしつ、おこなふ云々」東鑑五十「文永三年六月一日云云。阿闍梨兼日申狀符合之由。及口遊云云」愚管抄七「兒女子の口遊とて、これらををかしきことに申は云々」今此ことを考るに、口すさびと云に云るもあり。又今云あだことの意に云るも多かり。

○くちいれ
口入也。古く云るも、今云處とや相似たるものあれど、多くは今世に口ませると云意に聞ゆ。蠟螢日記下「是むかへにものす。忍びてた

ト清げなる網代車に、馬にのりたる男ども四人、下人はあまたあり。大夫やがてはひ載て、しりへに此事口

入たる人とのせてやりつ」空穂、藤原君五十「今又しぱりかけなん。なんちくさいれすとも、わがたから

のあらばありなんとの、しり給へば、にげていぬ」源氏、梅枝「おどりのくちいれ給ひしに、又總角こ

れかれにも口入させず」葵花、はつ花「こと事をわが口いれたらましかば、いかにきくからまし」

これら大かた俗に口ませる、又口クチダ出しする意と聞ゆ。明月記「寛喜二年七月十六日。入夜宰相明日資雅中將可初參。右大臣殿此事引導口入可進名簿歟云々」同「嘉祿元年十月二日云々。予案頻雖被示付我此事不可口入者。然可然由答申云々」これは今云所に相近き歟。

○くちかたむる
惠慶集『二月二日、相坂こゆるほどにうぐひすの聲をきく「せき守にくちかためてぞわれは行なきぬとつぐな山のうぐひす」

○口さがなき
僧正遍昭集、拾遺集雜秋「こゝにしも何にはふらんをみなへし人のものいひさがにくき世に」狹衣「口さがなき世にしすまへば、あな

かまとて

○くちすばむる 落窓之上「口すばめたるかたをかきたまひて云々」

○くちつゝみ 古事記明宮段に「吉野之國主等

於吉野之白櫻上作横白而於其橫白釀大御酒

献其大御酒之時擊口鼓爲伎而歌曰云云」とあり。今も口鼓打てともいひ又造酒家に酒米洗ふ時、

殊に此口鼓の貌なる態するは、古より傳へたる禮ごとなるべし。然るに記傳釋に「都豆美は都巣の字音也」と云、又新羅御征伐の時、其國人の聲鳴すを見聞て後の物とせられしはひが事也。かの鳥もかよはぬ吉野の奥の賊が、そのかみ既に此作行せる以ても、元よりつゝみと云稱のありし事は決し。

○くちとり 是も體言にて、馬の口をとる者を

さす。今昔廿七年、「口執聲ヲ早メテ罵ル」和名抄に

「唐韻云。鼃^反紅^{タチ}馬人。和名久知止利」

○くちはは へみへび うはゞみ 記傳九

、大なるを幣毘と云、なほ大なるを宇波婆美と云。きはめて大なるを蛇と云也。遠呂智とは俗に蛇と云ばかりなるをぞいひけん。名義は尾於杼呂智にて、尾のおどろくしきを云なるべし』とあり。今此俗に云所を考るに、くちはは、口之針の約略にて、かれが口中より針の如き物を出入するより云歟。へみとへびは通音にて同じ。此名は足なくして身を經て行を以て、經身の義にやあらん。うはゞみは、人を呑をもて、奪喰なるべし。反鼻をはみと云も、人を喰故の名なると同じ。此反鼻の字音より出て、へみとも、はみとも云かとも思ふやうなれど、へみと反鼻とは元より其虫異なるれは混すべきにあらず。をろちは彼が尾にするとき劍のありけるより云し事、荻蘆抄に委く云り。

○くちのは 夫木丹六、難、俊頼「あやしきもうれしかりけりおとしむるそのくちはにはにかゝるとおもへば」

二十云「遠呂智は、舊紀に大蛇と書り。和名抄には「蛇和名倍美。一云。久知奈波」日本紀私記云「平呂知」とあり。今俗には小尋常なるを久知奈波と云、や

とうらみ侍りければ、よみ人しらず「あはれてふ事こそつねのくちのはにかゝるや人をおもふなるらん」金葉戀、賤をいとふ戀、俊頬「あやしきもうちしかうけりおとしむることのはにかゝるとおもへば」築花花山四十「花山院妻子珍寶及王位といふことを御くちの端にかけさせ給ふ」

○くちびる 唇也。夫木四、春、仲實「春くれば野べの霞につゝまれて花のゑまひのくちびるも見ず」口透の義なるべし。

○くちびる つくれば歯さむし 居家必用云「兩面、二舌飾、虚造讒」國語云「言爽」日反其信云々」則歯寒。今日亡^レ趙則明日及^ニ楚齊矣^レ 莊子云「唇竭則齒寒」

○口ふたつでものをいふ 居家必用云「兩面、二舌飾、虚造讒」國語云「言爽」日反其信云々」佛書には兩舌ともいへり。こゝにも舌二枚にてもいふとも云めり。

○くちふで 口筆也。今云口上と云に似たり。築花はつ花七十一丁「村上の先帝のさまぐ御心おきて、此世のみかどの御心よりもすぐれさせ給へりけるも、

わが御くちふにしておほせられて、つくもどころの物ども御らんじては、なほしせさせ給へるを」

○くちまい 「うはまいとり」を見よ。

○くちまね 口真似也。新撰六帖五、光俊朝臣

「おのづからいもがつたへのくちまねびあらぬけしきもなつかしきかな」

○くちめ これらのみは間隙を云。林葉三「たどりゆいたのははしへくちめ多し。かすくともせよはの夏むし」又、「くちめ多みせたの長はしそみわたる月はあしにもさはらざりけり」猶此めは万葉に多し。

○くちやます 万葉九三十「玉だすきかけぬときなく、口不息わがこふる子を」

○口ゆゑに身をはたす 淮南子云「蘇秦死於口」帝範云「口者關也。舌者兵也。出言而不當自傷也。」明心寶鑑云「高宗皇帝曰。一星之火。能燒萬頃之薪。半句之非言。誤損平生之德。」

○くちよからぬ 是も口さがなき也。築花花山三十「くちよからぬ人々」又同「くちやすからぬものなれば」同とり^レの「世の人も口やすからぬものなりけり

れば

○くちよせ　今東國へは越後より巫タシナギめきたる
婦女子出で、亡靈をきく。是を口よせと云り。いは
ゆる縣巫カツタガの屬也。これも古くよりありけらし。築花、
後悔大將卷に、大納言どのようへなくなり給ひし所
に云、「又かみのまことそらごともきかんとて、左
近の乳母なく、御口よせに出たつに云々」かくて
其口よする者をばかうなぎとあり。台記久壽二年八
月廿七日條云「先帝崩後又寄巫口曰云々」

○くちろん　今云口論也。うたゝねの記「是や
桂の里人ならんと見ゆるに、たゞあよみにあよみよ
りて、これは何人ぞ、あな心う。御まへは人の手を
逃出給ふか、又くちろんなどをし給ひたりけるか、
何故かくる大雨にふられて、この山中へは出給ひぬ
るぞ。

○くちをきく　築花、とりべの「舟のかくゆく
に、すゝろさむくもおもしろし。すべくちもきか
ねばえかきもつけず」

○くちをすふ　土佐日記「正月元日たゞおしあ
ゆのくちをのみぞすふ。此すふ人々のくちをおしあ

ゆもしおもふやうあらんや

○究竟

維摩經五問疾品「雖現聲聞辟支佛。威

儀而不捨佛法。是菩薩行。雖隨諸法究竟淨相。而道

所應。爲現其身。是菩薩行」前漢書八十淮陽憲王傳
「進問五帝三王究竟要道。卓爾非世俗之所知」。

○くつすりけつ　夫木卅二難、仲正「山ざとは

庭さえわたら朝霜をくつすりけちてくる人もなし」
にや、此聲の君はあしさ事をもかしがましくいひ
○くつする　落窪一之上「こゝちの屈し過たる

病」とある、くつちと訓むべき也。おちくば二六「お
きなのとくに御あたりに、こよひ參りたること、お
もふほどなく、ねりりてくつちふせり」砂石集三上

「或里ニ癲狂ノ病アル男有ケリ。此病ハ火ノ邊、水ノ
邊、人ノ多カル申ニシテ發ル心ウキ病也。俗ハクツ
チト云ヘリ」和名抄には「癲狂カツチ〔太布流俗云
毛乃久流比〕」とある

は、却て古からず。もし義を以て新に訓たる歟。
○くつてとり　寛平御時后宮歌合「郭公なきつ
る夏の山べには、くつでいたさぬ人やすむらん」これ

郭公をくつで鳥といひそめたるはじめなるべし。それにつきていろいろ附會して云る中古後の説、すべてとりがたし。此事別に辨へたればこゝには省きつ。

○くつねぎ　　沓脱也。今も人の家の入口の士間を云。こをぐつろぐと云詞の意に心得たるはひが事也。明月記「建保五年十一月廿五日博陸加座上卿二人平伏。家衡卿下ニ沓脱家良卿動座」同「嘉祿二年四月十六日坂參内侍本所告參入立中門外頭辨出逢來。召次昇外沓脱入妻戸自廊柱内北經對代南簷子。着透渡殿云云」

○くつろぐ　　頼政集「袖ひけばさすがによりてつれなきやくつろぐもの、ぬけぬ成らん」新撰六帖三、光俊「大ゐ川なみうつせきのふるぐひはくつろぎながらぬくるよもなし」

○くどく　　「がまと」を見よ。

○くどく　　功德也。竹取物語に「いさゝかのくどくを、おきなつくりけるによりて」

○くどく　　口説也。堀川百首、寺、俊頼「はじめなき罪のつもりのかなしさをぬかのこゑぐくど

きつるかな」榎葉日記「さまでくどき侍りしかど」
委く耽き聞するを云ひ讀岐典侍日記上三丁「らいき律師すなはち参りて、經よみ佛くどき参らせらるゝ程に」同上「おい／＼とくどきたてゝなかるゝおとす」同上十九「佛をうらみくどき申るゝさま、いとたのもし」しのびね下「まづ參りて見給へと、やう／＼にくどきて云云」今俗言に「女をくどく」「質屋をくどく」などいふも、此ことのなごり也。

○くね　　竹垣柴垣の類を云。縣居翁國地考云「久爾と云名は限の意也。東國にて垣を久爾と云にて知べし。地は天と等しく廣く、國は限りあれば、狭きに似たり。故アメ都知とは云へど、阿米久爾とは上代には云ざりしなるべし云々」此説古事記傳にも引れて、誰も知れることなれば、こゝに省けり。さて今東國にて云處をきくに、板垣塀等の慥かなる垣は、皆かきとのみいひて、竹葦簀等の折かりたるをば分てくねと云り。たとへば「其垣ねをたよりにしてくねをかけよ」など云が如し。然ればくねとはくねらする方の名なるにや。

○くはし　　今云處もはら委曲の一方によだね

たり。此言は物の十分に具足して、缺たる所なき意の言なりければ、「古くも委曲、審詳の方にも用ふれども、むねとは美賞言にいへり。八千矛神の御歌に「佐加志賣遠ありときかして、久波志賣遠ありときこして」万葉十三丁に「鮎矣令咲」「麗妹爾」などをはじめ、眞細、名細、花細、伊湊細、等多くよみたる、何れも皆美賞たる也。

○ぐはひ しくはす

記傳、美斗能麻具波比

註曰「具波比は麻より連く故に具と濁れども、古へ頭を濁例なければ、本は久波比にて、久比阿比の約りたる言也。又しくはすとも云は、刺くはすの上略にや。万葉十六に、尺度氏娘子が、貌美き貴人のよばふをば聽すて、なほくしき醜男に逢と聞して、兒部女王の戯れ給へるうたに「よき物はいづくあかぬを坂門等之角乃布久禮爾四具比相にけむ」此四具比相も陰陽刺食合のよきをいふ也」

○くはびらあし 鍼枚足也。宇都保、俊蔭「あしてをみれば、すきはのことし「太秦牛祭々文「久波比良足仁舊鼻高乎絡付」

配也。夫木抄四、春、仲正「かくば

かりをしむもしらずたれにとて手もろに花をくばる風ぞも」こは古語の久麻流と同語也。雅言部委出。○くびたるゝ あたまがあがらぬ 低頭也。

濱松中納言一「此みかど御かたみ心なまめきて、あそびの道に心をいれ、つよくさかしきことはおくれてやものし給ひけん。一の大臣、后たちによろづおとりくびたれて、さばかり御心にいれておはする皇

陽縣のをあとたえてものし給ふ云々」とある。此言の意は、俗にあたまがあがらぬといふにつかへり。

○くひつみ

食積の字のまゝを云。四時寶鏡云

「正月元日の朝より十四日まで、日々賀客にすゝめ十五日の朝そのしたにしきたる米を、小豆粥に煮るを今俗例とす。小豆粥の事、荆楚歳時にあり。さて俗これを喰積といふは、すはまやうの物に、したがゆづる葉を敷、そのうへに米をもり、さて其うへに松竹など、おのづから生出たるやうに作りたて、鶴龜など作りてする、栗、榧、ほだはら、ゑび、柿、柑子などもりて、是を蓬萊といふ。漢土にても春盤と名付るものこれなり」といへり。今按に杜子美が詩に「春盤細生菜」と見え、周處が風土記に正旦

楚人五辛盤を上の事をしるせり。

○くびでもやる。 空穂、俊蔭「をのこども、もとめたてまつらんにおはしまさすば、くびでも奉らんと申しければ」

○くひもの 食物也。竹取物語に「あるときはかてつきて、草のねをくひものとし云々」空穂、藤原君^{二十}はかせどもにおほせ、をり所なく、くひ物なき人のためにとて、せに、きぬ、かね、車につみて出したて給ふ」

○くひやく 「ぬけ」を見よ。

○くびり殺す 「くびる」を見よ。

○くびる、くびり殺す くばむ 物の窄^{スボ}

り迫るをくびる」と云は、窄^{スボ}むと同言也。人の頸もくびれたる上にあるをもて、名となれる也。又その窄りたる所をほんの窄と云。又しめ殺すをくびり殺すと云も、綱紐等して引しむる時は、くびれ窄^{スボ}まりて、氣絶る故也。古事記上に「汝國之人草一日絞^{スボ}殺 千頭」

○くべる 竹取物語「かぐや姫翁にいふ。此かは衣は云々。火の中に打くべてやかせ給ふに、めらく

とやけぬ」○堀川百首、肥後「み山木をやくすみがまにこりくべてけぶり絶せぬ大原のさと」正治二年百首、陸信「雪うづむ山ちのそこの夕けぶり柴をりくぶるたれかすまひて」夫木九、夏、爲家「人とはぬやどのかやり火しばくべて夏もみ山の庵をさびしき」

○くばむ 「くびる」を見よ。

○くまの月の輪 新六帖一、衣笠内大臣「おくやまにすむあらぐまの月のわに夜めこそいとくもらざるらめ」

○くみで ぬなかにて天井をくみでと云ことあり。榮花浦々別「ぬりごめをあげて、くみれのかみなども見よ」堤中納言かひ合「いかにそとのくみいれのうへよりふともの、おちたらば、まことの佛の御とくとこそこはおもはめ」^{上文に}「ねりこことあり」今昔廿七^{一丁}「天井ノ組入ノ上ニ物ノコロメタヲ見上タレバ、組入ノ子每ニ顔有リ。其顔毎ニカハレリ」大鏡一三條「さて佛の面より東のひさしにくみれはせられたる也」此等の組入を組出と云は、たてまつるとも、たてまたすとも云と同例なるべし。八つ橋のくもでもこれらに

てさとるべし。

○くみめ 新六帖五、知家「としふともよもた
えはてじ玉かづらむすぶくみめのながきちぎりに」
○雲にかけはし 伊勢集「おとにきく天のはし
立はしたて、及ばぬ戀も我はするかな」

○ぐものあみ 蜘蛛網也。六帖、雜のおもひ、
紀友則「ぐものあみにふきくる風はとゞむとも人の
こゝろはいかゝたのまん」

○くもの子をちらすが如し 十訓抄二「主の、
あやつとらへよと、翠簾の内よりいひ出し給ひたり
ければ蜘蛛の子をふきちらすやうに逃にけり」
○くやしく 夫木七、夏、よみ人しらず「神
山の身をうの花のほとゝぎすくやしきとねをのみ
ぞなく」

○くよく 古本住吉物語に「くよく」とうら
びれてなくを見れば云々、又くやしくとも云り。後
撰戀一、元良親王「くやしくとまつ夕ぐれと今はと
てかへるあしたといづれまされり」是は來ヤ
く云に悔々を兼たる也。

○くら くらとは凡て物を置に就たる名也。人

の座處ブルをくらむと云も、座居の意、胡床クサギをあぐらと
云も、足座アグクラ又揚座敷の義、又馬の鞍アマハ、千座置座、興代
などの類皆然り。その中にて、今世には専ら倉庫の
上に此名遺れり。是もふるき事也。万葉十六丁ダウジに
「からたちのうばらかりそけ倉將立ケラタム」また二十丁「子師田
乃稻平倉爾舉藏而タツシテ」空穗、藤原君トモ六丁「町まとへに、ひ
はだのとゝらう、わたとの、くら、いたやなど
おほくたてたる」又同「所々をたびつ、御まやにし
みくらまち政所にし」又八十「ふたまちの所よおもて
にくらたてならべたり」催馬樂、此殿西「このとの
にしのくらがき春日すらゆけれどもつきすにしのく
らがきや」

○助労アヅカラ 後漢書四十七虞翻傳「先帝開招土字。
助労後定」

○くらかけ 鞍掛也。宇治拾遺に「移のくら甘
具、鞍かけにかけたり」とあり。これを見れば鞍掛
と云ものは、もと馬の鞍をかくる具の名なりしな
り。

○くらげのはね 夫木廿七、雜、伸正「わがこひ
は海の月をぞ待わたるくらげのはねにあふ夜ありや

と「釋は拾葉抄に出。

文選、木華賦云「水

○くらげはえびを目とす。
母目^{トスニビテ}蝦^{エビ}爾雅翼云「水母不能^{レバ}動。蝦附^{レバ}之則所^{レバ}往如^{レバ}意」嶺表紀異云「水母有^{レバ}足無^{レバ}口。眼大如^{レバ}覆帽。不能^{レバ}動。蝦或附則能往」淮南子云「むかしある國より敵せめ來れる時、覽者ありしが、盲者がもとへかくとつげしかば、盲者やがて來りて、覽者を負てにげしかば、兩人ともに命をたすかりぬ。其得たるところをもつてすればなり、もし盲者につげしめて、覽者にはしらしめば、なんぞたすかる事を得ん。これ水母目^{レバ}蝦^{エビ}と同談也。

○くらふ 土佐日記 「十二月廿七日、かちとりものゝあはれもしらで、おのれし酒をくらひつれば、はやくいなんとて云々」寛永紀行云「伏見より夜舟にのる云々。夜中過るほどにくらはんからんかとよぶ舟あり」漢籍の訓には常の事にて、元より古言にはあれど、後世はきたなき言のやうにもなれるさまなれば引おくなり。

○くらふ 紀貫之集「いせの海のあまとならばや君こぶる心の深さかづきくらべん」此言三言の

某くらべの條に多く出。

○某くらべ 今も「せくらべ」「たけくらべ」「ちからくらべ」「かほくらべ」「心くらべ」など云。古くは殊に廣くいろいろいへり。後撰戀一、定文「君をおもふふかさくらべに津の國のはりえ見にゆく我にやはあらぬ」同戀三に見ゆ伊勢集「春にさへ忘られにけり宮なれば色くらぶべき花だにもなし」仲文集「あがほとけかほくらべせよ極樂のおもでおこしはわれのみぞせん」安法々師集「松はとるいつをもこけのむすぶまでいのちくらべにとはぬ君かな」後拾遺雜相摸「さもこそは心くらべにまげざらめはやくも見えし駒のあし哉」新撰六帖、芝「駒はなつ野へのうなるがしばくらべ永き日くらすこれやなぐさめ」拾玉集三、山科「あはれなりこれも世わたる庵ぞかしその山しなの袖くらべまで」此外拾遺員外下二十に「烟くらべ」金葉雜上の端詞に「けんくらべ」空穂菊の宴に「娘くらべ」同藏開に「よはひくらべ」古本今昔六二「術クラベ」江家次第四定受領功課事に「多計久良戸」夫木八、雅有の歌に「露くらべ」太平記十四、箱根竹下合戦條「目くらべ」にあつまり居ては、かなま

じ古事記に「力競」和名抄に、牽道美知久良間、競渡、布奈久良倍、競馬久良間宇麻などあり。其中にも心くらべと云は、歌にも多くよみ、物語書中にも數じらすあり。

○くらやみ 拾遺集、物名「花の色をあらはにめではあだめきぬいざくらやみになりてかざん」

○くり 厨の略也。和名抄に「説文云。厨反_{直詠}和名久利夜。庖屋也。斷理魚鳥二者謂之庖丁。俗云倉厨也」と見ゆ。今の俗本堂厨など云て、寺院の庖厨に此名の残りたるは、かのころもと云名の信服に遺れる類ひなり。

○くるしからず 後拾遺雜二、伊賀少將「わする、もくるしくもあらずねぬなはのねたくもおもふねざしなければ」月詣集二、靜綠法師「あたりなる花にはいとふ春かせのくるしからずや青柳のいと」

○ぐるた 江戸の俚言に、樽をぐるたといふ。丸木の棒をぐるてん棒と云り。こは圓き物をぐるぐまるきなどいひて、ぐるとは圓き形ちを云語也。

空穂、俊蔭に「阿修羅怒れるかたちを出して、まなこを車の輪の如く見くるべかして」といひ、今の世

の言に、ぐるくと目の圓き人とも、ぐるりと丸いとも云これ也。

○くる、樞也。今もくる戸などいへり。万葉廿三十「むば玉の久留爾久枳佐之かため等之妹がこゝりはによくなめかも」

○くる、與也。空穂、藤原君二十「けいしどもある限りの物どもをはこび出して、此人どもにくるゝ」十訓抄云「むかし無縁なる法師、人のもとにて物こひけるに、ひんがしおもてに居たる人はあたへす。西おもてにある人は、時々物をとらせければ「おこなひをつとめてものゝほしければ西をぞたのむくるゝかたには」とよめり。徒然草云「物くるゝ友」と有。但し傳八三十四に、「御幣を「御手與也」といへるはひが事也。此事は神樂の幣の條に辨へつ。神樂歌、枚、「あふさかをけさ越くれば郷人のちとせつけとてくられし杖也」

○くるゝと 樞戸也。おちくば一之下「樞戸のひさし二間ある部屋の云々」

○くれぐれ 今の世の通俗の手簡にくれぐれと云ことありて、専ら吳々と書習へり。接に、然かか

くはたゞ借字にて、言の義は繰々なるべし。繰返していふ意なれば也。

○くれてやる 落窓一之下「しらずがほにて、くれてやらんとしるものを云々」此こと既に三言のくるゝ條に出。見合すべし。

○くれのあき 暮秋也。千載雜下「くれのあきことにさやけき月かげは十夜にあまりてみよとなりけり」

○くろきすぢ 古今集雜上「おちたぎつ瀧のみなかみとしつもりおいにけらしなくろきすぢなし」
○くろきほむら 夫木卅四、西行上人「なべてなきくろきほむらのくるしみはよるのおもひのむくいなるべし」

「さじまき」を見よ。

○くろきまき 爲忠朝臣集「黒雲に風おちきては夕立の雨やどりする木々のむら鳥」土佐日記「くろき雲にはかに出きぬ」更科日記「空はすみすりかけたるやうにくろき雲出きて」

○くろけぶり 讀岐典侍日記上十一「僧正の、さしもかしらより黒けぶりを立ていのれど、そのしる

しと覺て、こゝちやすますまさるこゝちのすればと仰らるゝをきくは、何にかは似たる云々」又丁左聲ををしますかしらより誠にくろけぶり立ばかり、めも見あけす念じ入て、佛をうらみくどき申さるゝさま、いとたのもし」宇治拾遺二丁「くろけぶりをたてゝ、しるしあらはさんといのり云々」又「涙をながし黒けぶりたてゝさせいし給ひ云々」

○くわいし 懐紙也。東鑑廿二丁「建暦二年正月廿六日云々進懷紙同卅四「仁治二年八月十五日。

有當座和歌御會。女房被進懷紙云々同五十「弘長三年八月六日。爲被廻減罪之謀。以彼懷紙裡可被書寫經典」つくば問答序「ふるくわいしのうちにかきつけ侍る也」袋艸子懷紙書法。此懷紙は古き時より用ひならひけん、佐理卿の懷紙に詩をかゝれたるを傳へたるよし、閑田耕筆に云り。

○廻文 カクモン 甘露寺權大納言元長卿記云「永正五年正月十四日。和歌御會書廻文以鎌殿遣之。懸有

慶音。右御題。來十九日可有披講。可令參給由。被仰下候也。正月十四日。元長。中御門大納

○畫像

異聞類策云「王偉義者仕齊名譽學士。是畫爾女ノ生セル子也。父母ヲ祭ルニ畫像ヲ掛ル」

○過書船 （グバシブキ）

天道船 過書船と云ある書に「神

君の御時、有功の下民を御取立有しに、時過期に後
れて訴出しゆゑに、過書といへり」とあり。今按に
然るべからず。古くは、所を越て何方へもゆゑなく
過るを過所といへり。令條式目等にも此名見ゆ。も
とは唐書令に「諸渡開津及乘船筏。上下經津者皆
當有過所云々」とあるに依る也。淀川の過書船の
事いへる書に「昔は淀より神崎難波へ乗船せし故、
淀船といへりしを、伏見の城繁昌の時より、伏見輶
湊の地となりてより、渡を越てのばるなり」といへ
り。是を以て思へば然か乘越過る免許の書によりて
過所を過書とは改めたるにてもあるべし。天道と云
も、もと淀渡にて、つひに夜船の名の如くなれる也
といへり。

○活計 （クワツケイ）

白氏文集二十老戒律「我有白頭戒。聞於

韓侍郎。老多憂活計。病更懲班行云々」同三十處分
貧家殘活計。正如身後莫相關」

○闇達 （クワツタツ） 後漢書二十馬武傳「武爲人嗜酒闇達敢言
○注「闇達大度也」とあり。然れば今俗につかふ所
はとりちがへたる也。

○ぐわつび 月日也。文のおくに月日をかく事
大和物語に、近江守公忠の文のおくに、月日かきた
る事見えた。又源氏物語若菜上に、明石入道の文
のおくにも「月日書たり」とあり。昔の雅文にも書つ
る事にぞありけむ。

○くわゐひろふ 堀川百首、顯仲「たなつもの
みそのにまきついざこともそともの小田にくわゐひ
ろはん」

○くわんざよ 還御也。中務日記に「くわんざ
よまちまゐらせて」又「ゆふさりがたくわんざよあ
りて」又「くわんざよましくて、つとめて」など
多く見えた。

○元日 書紀、孝德卷「大化二年春正月甲子朔。
賀正禮畢即宣革新之詔」とある、是元日を賀する事
の見えたるはじめなり。

○くわんじゆ 卷數木 くわんじ
ゆとは、神社佛寺等より、祈禱の札を木の枝につけ

て奉るを云。又箱に入て參らする事もあり。其枝は桃梅などの花の枝を多く用ひたり。拾玉集五 文治六年に『公衡中將祈禱成就之後。遣卷數。返事之次皆水精念珠。弘法大師三鉢等送り給ふ包める薄様に、かきつけてはべるうた「さりともとおもひくていのりけん心のねより花ぞ咲ける』御湯殿日記「元龜三年十二月廿二日、ふしみのはんじゆゐん御くわんじゆ、ふか草のあんらくさやうゐんよりも御卷數まゐる」今昔一、寛蓮墓打たる所に「丸帳のほころびより卷數木のやうにけづりたる木の、しろくをかしげなるが、二尺ばかりなるをさし出して、丸が石はまづ爰におき給へといひて、中の聖目をさす、寛蓮その所に置つ』東山殿年中行事「十二月晦歲暮、御卷數之事は、今日以前にも所々より進上候儀も有之、雖然先御對面所の次に置也。必其日請取被申、申次は詰番にて候へば今日卅日可參儀不定仕候へども、其請取の日同朋衆に、是は歲暮の御卷數とて參候へども、大卅日に所々のと一度に披露申候間、當座には不申入候、爰に置申候。自然可被心得之由申置候也。事によりて其當座に申入儀も可有之候へども、

歲暮に限りて前々のを取捕候而、梅のすばえに結付候をいくつも取あつめ、本と末とを紙よりにてゆひ候て、持て參て御對面所にて御頂戴あらせ申事專之儀也。又箱に入候をば如先成御廣蓋に居候て持參申候段、勿論いづれも申入時は、所々よりの御卷數と申入候て、御頂戴あらせ申者也』伊勢家禮式「卷數いたゞかせ申事、先の御主にあたらぬやうに戴かせ申て、さてやがて先を折て持て歸るものなり。卷數の先惣別人にあてぬもの也。氣をつかふべし」
○勸進 文選、勸進表劉越石、注李善曰「何法盛晉書曰、劉琨連名勸進。中宗喜之」同注曰「晉紀曰。劉琨勸進表。無所點竤。封印既畢。對使者流涕而遣之」
○くわんせう 遠昇なり。千載雜中「遠昇して侍りける人のもとに遣しける、藤原季經朝臣「うれしさをよその袖までづゝむかなたちかへりぬるあまの羽ごろも」職原抄私抄壞翠軒云「殿上より地下へおりて、又殿上するを還昇の殿上人と云。千載、神祇「大納言にも還任して侍けるとなん」とある、此還も同じく還俗の還也。

○くわんぬき 和名抄云「關木」。說文關古選反。亦作關。

俗云。貫乃木。以横木持門曰關。所以閉也。」

○くろぎまさ 江戸にて割たる薪をさいまさといふ。即割薪、樽木

薪の謂にて、まさとは燃木の約れる言也。さて此くろぎを常に黒木とく故に、一種黒炭の出る木歟と

おもふ人もあるど、筏によみ合する樽木を、久呂と

轉用せるにて、たゞ丸木の稱也。小原女が京へ賣に

出るくろ木も同じ。万葉四八丁「板蓋之黑木乃屋根者」八丁「黑樹取草毛刈乍云々」八丁「黑木用造有室者」とある、此等の内屋根にいへるは古き繪によ

くかける如く、板蓋の上に丸木を並べたるなり、貞觀儀式云「踐祚大嘗祭宮者構以黑木用蓋」とあ

る、是は古へを摸して丸木作りにせるを云。

○歎樂 痘を歎樂と云し事おしなべての事にあ

らず。東鑑「承元二年正月十一日云々。依將軍家御歎樂延及今日」とあるは、年始の事なれば、筆者

の心づかひもてかける詞也。

○君子國 国爲吾國。萬古日種而不雜異姓。皇統繩々枝葉蔓々。

本朝文粹三善清行封事云「以君子

有長舌惟厲階」また漢李延年が、吾が妹の李夫

君々臣々父々子々。名正分明者。恐爲千界利土冠云々」神皇正統記ニ「凡此國をば君子不死の國とも云也。孔子世の亂れたる事を歎きて、九夷に居んと宣ひける、日本は九夷のその一也。異國には此國を東夷とす。此國よりは又彼國を西番といへるが如し」後漢書七十東夷傳「王制曰。東方曰夷。夷者祇也。言至有君子不死之國焉」海南子四「地形訓東方有君子之國」注「東方木德仁。故有君子之國。其人冠帶劍火燒湊彌山」大歎「不食獸。使二文虎也」

けノ部

○螢火クイクワを取て湊彌をやく

圓覺經云「如取螢

火燒湊彌山」

○芥子ケシを以て須彌をつゝむ 念佛三昧經云「取

三千大千世界内於口中能以須彌内於芥中」聯燈錄云「納湊彌於芥子、擲三千於方外」

○傾城 詩膽印篇云「哲夫成城哲婦傾城、妻人の美人なる事を武帝の前にて賞嘆し、起て舞たる

歌に「北方に佳人あり。絶世にして獨立、一笑^{スベ}傾^ニ人城。再笑傾^ニ人國」と云る、これらの詞より美女の稱にうつり、美女の稱より遊君の稱にいひうつせしなり。

○けいば 賀茂競馬

競馬也。御堂關白道長

公御記「長和二年五月六日丙申。終日小雨下。今日有競馬」台記「久安二年九月十八日。午刻參桂殿。法皇上皇皇后御船幸馬場。余自陸參。有六番競馬^{水干}皆勝負申刻事畢」同廿二日「少時^{午歎}法皇上皇皇后幸城南。寺祭如常。無競馬。有流鏑。事畢上皇還御」同廿五日「少將法皇上皇皇后渡御有七番競馬^{水干}二番勝負了三番久競被追入。四番出間雨下被停。殘番明日可有云々」羽。先之三四五番勝負云々。六七番畢退出。參彼堂。今日重文勝云^{久歎}「余未參仍歸宅纏頭。後聞雖勝依久競。法皇怒追入不令方人纏頭云云。因之勘當重久云云」と見ゆ。其流行たるさま見べし。猶此競馬の事、續紀より見えそめたれど、古き處はこゝにさしおきつ。安多武久路上、^{近藤}壽俊「或人問云。競馬と云事我朝にて行はれ、神事等にも執行せし事なれども、其法式も

原始も分明の儀をしらず。壽俊答云。競馬と云名目は、和漢共にあり。既に本朝式に「五月五日競馬和名久良間字麻麻」と出たり。按に、我朝の昔朝廷にては、六衛府並に左右馬寮の乘尻その乗手とす。是は二騎づゝ馬を馬場本の左右に並べ立て、鉦鼓にしたがひて二騎一同に馬を一さんに馳て、其遅速に依て勝負を決す。速く逐越たるを勝に、遅く乗おくれたるは負也。頼基卿の歌に「わが駒もけふにあひくるあやめ草おひおくる、やまくるなるらん」とある心は違あれども、詞は競馬の事也。左右遅速なきを持とする也。さて又馬場の末に標を定めて、馬の足次を計る也。是を印木とも勝負木ともいふ也。惣て公家にては、此勝負にまくる事を殊に耻とする故に、乗手は命にかへ勝負をあらそふ事也。其事今昔物語著聞集にあらまし見えたり。しかしながら關東武家にてはさして勝負を争び決すと云程の事も見えず。東鑑にも「文治五年四月三日鷲岡の乘馬長流鏑馬競馬三番次に三嶋社の祭流鏑馬競馬三番」と有。其後も競馬の事見えたれども、三代將軍家の比は勝負を争ひし事は見えず。頼嗣將軍の御代建長八年八月十六日、

神事競馬の有し時は、武士と隨身と勝負を決せし事見えた。是は頼嗣公は京都より御下向の御事なれば、公家の競馬をうつされし事成べし。按るに、公家の如き競馬の争ひ武家にあるならば、無理の怪我もあらんとてなるべし云々」賀茂競馬之事、園太曆云「文和四年五月五日。賀茂競馬如件ニ^一水記云「大永六年六月十一日。午時賀茂競馬○令見物云々」詞林采葉曰「或記云伊呂波字類抄云。本朝事始云云。伊呂波字類抄云。祭祠日乘馬者。志貴明^天天皇之御世。天下舉國。風吹雨零。爾時敕^二ト部伊吉若日子^三令ト。乃ト奏。賀茂神祟也。仍撰四月吉日馬繁^四鈴蒙^五猪影^六。而駆馳以爲祭祠。能令禱祀。因之五穀成就天下豐平也。乘馬始於此也」^七河海抄同之○景物明衡往來云「所慕者勸益役也。旨酒一樽景物少々相具。可令推參侍乞莫成厭却」○けう希有也。徒然草^上_{六段}男あしく引て、聖の馬を堀へ落してけり。聖いとはらあしくとがめてこはけうの狼藉かな」沙石集三上「これこそいはゞ負たればこそ勝たれ。かちたらばまけなまし。かしこくを負にける。希有にこそまけにけれ云々」○けうくし げうくし げうさん

上

に出たる希有を重て、希有々々と云也。又是を濁てげうくしとも云。此時は少し心のかはりて聞ゆる、詞の妙なる所也。又それよりげうさんといふ詞の出来るをつひに仰山の字を填て、其意とおもふはたがへり。げうさんは希有多を音便にさんとは云る也。大鏡八「行幸には入道殿のといひし御馬に奉りて、御隨身四人と我もらんもんにあげさせ給へりしは、けうくしかりしものかな」

○げうさん、「けうくし」を見よ。

○けうとい京の人によく云ことば也。氣疎の意にて、むかしより云詞なれども、其つゝきに依て少しづゝのかはりめあり。又雅俗の變もあり。蜻蛉日記中「貞觀殿の御方はおとゞし尙侍のかみになり給ひにき。あやしくかゝる世をとひ給はぬは、此さるまじき御中のたがひにたれば、こゝをもけうとくおぼすにやあらん」同下「むねはしる迄おぼえ侍るを云々。みすに手をかくればいとけうとげときくも云々」拾玉集四^三五十「わざもこがけうときさまにおもひしにふかくみのりの花をながめて

らはせり。延喜式一云「交易商布」空穂、俊陰「け
やくの舟につきて、此くに、かへりぬ」同、藤原
君「けうやくの船につきて」
○けがさぬ 夫木八夏、慈鎮「ほとゝぎすみあ
れのしめにひきこめてほかにけがさぬことをきかば
や」

○げこ 「じやうご」を見よ。

○けしからぬ 空穂只こそ「わが子をうしなは
ましや。けしからぬ所にかよひいそきて、かなしき
ことを見る」と同藤原君十一「兵衛まめやかにかく
けしからぬことうけ給はらじ、たはぶれにても人の
御あだごとかな」同四十「ちむらのあやにしきもわだ
さん。けしからぬことはわすれてましね」枕冊子二十二
七

音にあらず。萬葉に「潮氣」^{シホク}「日異」など古くよりよ
みたれば、此問言と字音と適暗合せし也。されども
しきとつゝきては、景色と云連びに落入て、つひに
字音を免かれず。されば此言古き歌には見えず。撰
集にては初て後拾遺集よりあまた見えそめたり。其
以前には、後撰集戀四のはし詞に「人のむすめにい
と忍びてかよひ侍りけるけしきを見て、おやのまも
りければ」と有。歌には中務集八丁「春さめに空のけ
しきをつゝめどもけふの小松は猶ぞ引つる」齋宮女
御集「へだてけるけしきをみれば山ぶきの花ごゝろ
ともいひつべきかな」これらや、その見えたるはじ
めならん。

○けしやう 化粧也。雅文にはけさうと云り。

伊勢物語に「せんさいの中にかくりてかちへいねる
かほして見れば、この女のとようけさうして、うち
ながめて」竹取「御身のけさういといたくして」榮
花はつ花「よるよりやすくもあらずけさうしさわぐ」
落窪一之上二十「いときよげにけさうして云々」空穂
にはけしやうとも云り。
○げしやくばら 外戚腹也。後拾遺賀、大中臣

輔長『はかまき侍りけるに、内外戚のおほぢにて、

輔親公賀侍るをみてよめる。藤原保昌朝臣「がたぐ

のおやのおやどちいはふ也この子のちよを思ひこそ
やれ』今俗妾腹の子をげしやくばらと云。即外戚腹

の字也。但内外戚と云るは、内戚は父方、外戚は母
方なれば、こは歌にもおやのおやどちとよみて、嫡

妻の子を云なり。外戚は妾腹の意ならぬを、もしは

下借と心得て卑しむ方に云ならひけるにや、おばつ

かなし。源氏、若菜上^{五十}_{三丁}孟津抄「外戚腹なれば」と

あり。空穂印本初秋上^{減本沖津白浪}「ないしやくにもげしやくにもげしやくにも」

女といふものなんともしく侍る増鏡烟末「御このか
みにてものし給へど、御げさくのよわきは、今も昔

もかゝること云々」

○げしゆにん 下死人

下手人也。人を殺せ

はその相手を官より召て死を給ふ。是を下手人とい

ふ。そはもと其人の手をくだして、對手を殺せし故
に云也。然るに今世俗に、その殺されし人のかはり

に殺さるゝを云と心得て、解死人又下死人などおぼ

えてかくはひが事也。明月記、建暦三年二月五日「弁

語云。造宮所聞闘詮事。召仲章朝臣。於河陽被勘責。

被召下手人云々。善政歟

○げす

下衆、下郎などいへり。蜻蛉日記^土_二「か

たるどものつきなべなどするも、いとかなし。
げすちがなるこゝちして、けおとりしてぞおばゆる」

保憲女集「かしこきは高き人となり、をさなきはげ
すしき身とさだめける」空穂^{俊隆}「下寸の母と源

氏、東屋「いとむくつけくげすくしき女とおばし

て」

○げせつ 下説也。順德院御記「承久二年云々」

下説。源氏歌は劣也。狹衣のうたこそよけれど云人

ありと云。此條心うくあさましき事也云々」

○下歎 「あした」を見よ。

○けだかし 菊花はつ花「御かほのかほりめでた

くけだかくあいざやうづきて云々」

○けだし

蓋也。中古後は漢籍の訓にのみ遺り

たれば、からめくが如くなれど、萬葉に多くよみた
れば本よりの古言也。言の意は氣慥^{ケタツ}にて、氣はけは

ひ、ありげ、なさけなど云けと同じくて、様子を云語

也。其を、もしやと云意に用ふ事は、今世の言に「其

事は定て云々」「極て云々」「決して云々」とやうに

推量りて云中にも「慥かに云々」とも云。此かをけに轉じて心得べき也。さて萬葉には二十四「霍公鳥蓋哉鳴之」また三十「氣田敷藻あふやと思ひて」と云を始て、三四十七丁、四四十四丁、又四十八丁、又五十七丁、

七十丁、八五十七丁、九十六丁、四十四丁、十二二十九丁、十五三十丁、十七四十六丁、十八八丁、十九廿丁等に出。

蓋字の意は、學山錄六詩小雅、黍苗篇正義云「蓋者疑辭。亦爲發端」孝經諸言「蓋者皆示不敬專決」禮器云「蓋道求而未之得也」檀弓云「蓋有受我而厚之者。是發端也云々」檀弓正義云「蓋者意有謙退不敢

指斥。事雖不疑。亦云蓋也」

○けだもの 「けもの」を見よ。

○けちかし 夫木十五秋、爲實朝臣「軒つたふ

つたのすゑばにかくろへてあまりけちかき日ぐら

しの聲」

○けつしよ

闕所也。今の世には罪有人の、家の資財を官に没入るを闕所と云也。中昔には、罪有人の庄園領知を没入せられし其跡を、いまだ可レ領主なく、官物になりて欠てあるをいひき。よろづの詞如此轉々して、本の意を失へるが多かり。

○結構 其事をしつらひかまぶる也。今俗に云所は、其結構をなして、よく出來たる上より云ことの轉じたる也。白氏文集二十九「疏鑿出人意結構得地宜」

○げつしょく 「につしょく」を見よ。

○げつたん 「ひやうばん」を見よ。

○けつまづく 今昔廿三陸奥云々條「我レニ蹴蹠テ倒タルヲ」

○けづりかけ 削花 木綿 めど 今正月十四日松を取て、其跡の門戸所々へ削りかけとて、

柳木以て削りかけたるを刺。これ中古のけづり花の

なごり也。古今、物名「二條后春宮のみやす所と申

ける時に二めどにけづり花させりけるをよませ給ひ

ける、文屋康秀「花の木にあらざらめども咲にけり

ふりにしこのみなる時もがな」新古今雜上「佛名の

あしたけづり花を御らんじて、朱雀御製「時過てし

もにかれにし花なればけふはむかしのこゝちこそす

れ」又『花山院おりゐたまひてまたのとし、御佛名

のけづり花につけて申侍ける、公任「ほどもなくさめぬる夢のうちなれどその世に似たる花の色かな』

新千載に佛名の菊花と云るは、延喜式「御佛名菊削花二枚」と見えた。新續古今に「ひえの山にかたわきてけづり花しける事侍るに、かたきのかたにをみなへしを作りたりける」とも見えた。蜻蛉日記に削木と云るも同じ。書言字考三九丁左云「削花。初春十五日。以楊柳枝爲之插門戸及馬道事。見歲時記ことあり。かればかの古今集のめどを奥義抄其外に著とせられたれど、馬道にて、今も廓下口等に刺と同じこと也。又雲圖抄に其圖を出せるを見るに、いにしへの木綿花のなごり也。

○けづりばな 「けづりかけ」を見よ。

○けぬるし 夫木廿五難、仲正「うしほねるかまどのけぶりけをぬるみゆきもたまらぬ海人のあはらや」

○けのあな 毛穴也。竹取「もち月のあかきを

十あはせたるばかりにて、ある人の毛のあなさへ見ゆるほどなり」

○げはう下駄 「げはうあたま」を見よ。

○けはれ 裹^{ケハレ}也。此近のなかの老人其孫に云やう「けはれの時の用意に、着物はたしなみおけや。

一時に皆おろして著古すべきにあらず」と云是也。袴は常の服、晴は晴著なり。論語に「紅紫不以爲^テ爲^セ」とありて、王肅注に「袴常也。私服非^ニ公會服」と云り。但し衣裳ならでも云事なり。無名抄に「せみの小川の歌をよみたりしを、禱宜祐兼難じて、かやうの事をばいみじからん晴の會にこそ取出べけれ、かゝる袴の事によみたる無念也」とあり。

○げひ 「ふぐり」を見よ。

○けふそく 脇息也。此物古くはわざつきといひ、中古のほどはおしまつきと云り。雄略段歌に「和岐豆紀」脇机なり齊明紀に「夾膝」^{オシヅキ}「案机」^{オシツキ}天武紀に「机杖」など訓たるは、中古の點なればこれらもわきつきと訓むべきにや。和名抄に「几西京雜記云、漢制。天子玉几。公侯皆以竹木爲几。和名於之万都岐。今按几属。又有脇息之名。所出未詳」とあり。此おしまづきといふ名は押^シ座^シ几の意也。

○けぶたし 相摸集の端書に『おのれけぶたきは、げにこそ「かきつめてむねのあたりに云々」堀川百首、基俊「すみがまに薪こりたく夕ぐれはおのけぶたきの、さと人』又基俊集上「夏の夜を下

もえあかすかやり火のけぶりけぶたき遠の山ざと
夫木十八、冬、好忠「くゆりつゝ世にすみがまのけ
ぶたきをふきつゝもやせ冬の山かせ」夫木十九雜、
和泉式部「かやり火のけぶりけぶたみあふぐまによ
るはあつさもおぼえざりけり」

○けふをはれ 新撰六帖五雜、知家「つちまつ
りけふをはれとも見せさやのさきをりかけてねるは
たが子ぞ」

○げほうあたま げはう下駄 俗にかしらの
長き人をげほう天窓と云。是に色々の説あり。先づ
續夷堅志曰「嘉熙年間に十歳なる子を術者の盜取て
食を與ずして櫃中に隠し置しを、祖父の見出せし事
あり。此比人の吉凶を云もの、人家の童男をとりて
食を與へずして死せしめ、後その拙骨を收め置。魄
をとめさせて、ものいはするを名づけて、髑髏神
と云」此類の事、癸辛雜識または輟耕錄等に見えた
り。又北山醫話にも、犬蠱蛇蠱猫神げほうがしらの事
見ゆ。又達酢散尾云「增鏡第八に、西園寺公相のお
る御かしらを、人のぬすみとりけるとぞ。めづらか

なる御顔の下みじかにて、中ほどに御目のおはしま
しければ、外法とかやまつるにかゝるなまかうべの
入事にて、何がしのひじりとかや、東山の邊りなり
ける人のとりてける云々」是等の事を傳へ誤りて、
かしら長きを名付てげほうといひ、甚しきに至りて
は福祿壽といふ像の別名のやうにさへいへり。一書
云「西域記曰。屈支國其俗生々子。以木押頭。欲ニ
其履。履一云云。此屈支國の義を以て外方頭とい
ふ云云」按に玉篇「履履薄也」とあり。しかればひら
たきといふべけれど、長きにはあらすいか」となど
あり。右の内増鏡にあれば、外法頭といふ説頗所あ
るにやあらん。いはゆる外道の法のよしなるべし。又
此西域記に云履履の平なるは、今ひらめいたる木履
を外方下駄と云によしありてきこゆ。

○けもいよだつ 夫木卅二雜、俊頼「ことのね
のことちにむせぶ夕ぐれはけもいよだちぬすりろ寒
きに」

○けもの 一けだもの 和名抄、毛群類に「獸
を介毛乃、畜を介太毛乃」とあるは、後に前後の訓
を互に譲りたるにて、畜は介毛乃と有べきなり。畜

とは大祓詞に「畜生志」と有て、牛馬羊犬雞豕の屬の如く、飼置物を云。即飼物の飼を約て氣とは云也。されば右の六畜の中に雞も有をおもふべし。又獸は野山に栖て、祝詞に「毛龜物毛柔物」と云るやうに卽毛津物の義也。かの木津物をくだものと云に合せて知べし。又毛生たる物を毛津物と云は、鳥を翅、魚を鱗と云が如し。今世の大かたの人此差をわいだめかねて、介毛乃も介太毛乃も一つに心得て、畜と獸とを混せる事多かればことわる也。

○けら／＼笑ふ　から／＼と笑ふ　宇治拾遺五十八「きやう／＼と笑ひて云々」此きやう／＼を今はけら／＼といふ歟。又軍談に勇士の笑ふ聲に、から／＼と打わらひてと多くいへる、けとかと音通れば同じことにや。

○けん　券にて、請文也。落窓三左「男君けんはありやととひたまへば云々」源氏須磨「御さう御まきよりはじめて、ところ／＼のけんなどみな奉り

おきたまふ　○檢挾　一稱　こゝは盲者官名に就て云也。中原康富記に「嘉吉四年四月七日。詣勸修寺右兵衛

權佐亭。只今誓願寺之勸進平家爲聞。可罷出。可同道之由。被命之間。伴參之。左中辨同被出之。皆步行也。予奉連歩。誓願寺之奥心ニ阿彌陀佛御堂有之。珍一檢挾。自今月三日始之。而重一聲損問。今日本一語之」とあり。檢挾一名あまた見えたり。

○けんくわ過ての棒ちぎり　平家物語十二云「四國を九郎判官せめ落されぬ。今は何の用にかあふべき。六日の菖蒲會にあはぬ花、鬪過てのちぎり木かなとわらはれける」とあり。かれば古き諺にてあるなり。今は棒ちぎりへどちぎり木と云し也。

棒に棒をそへたるもの也。

○玄關　陀山石云『玄關と云もの、僧榮西初

めて建仁寺に造れり。玄の關門と云心にて、玄關と號す。入口に二扇の門あり。其門は敷瓦にて上の中唐なり漸に歩みて履を脱して小階に升り、客廳に至れり。さらば玄關とは門の名にして、廳の名には非る也。今世俗に玄關と呼者は、堂上方にては車よせ、武家方にては式臺とも稱すべき者にして、玄關の名とは甚不相應の事なり。さて此玄關の名、建仁寺の

築西にはじまるにはあらず。彼邦には舊く禪家に稱する名目也。

唐詩にも「朗公爲是披玄關」とあり

しかと覺ゆ。卻て今の世に稱する所の敕使門、御成門、中門、所々の客路次などの類が、玄關の義によく叶ふなり。これ幽玄の徑にして、常に人の踐ざる處にて、期つて開くの門なる故に、玄關の號あるなり」今按に、此説の如くなれば、玄關を卽禪閣とも

禪閣ともいへり。李白詩に「遠公愛康、樂爲我開玄關」

又賈嶠詩に「竹陰移冷月。荷氣帶禪關」などもあり

て、皆玄叔に入る關門と云なり。猶いはゝ頭陀寺碑

「玄關幽鍵。感而遂通」李白詩「蕭條出世表。冥寂閉

玄關」岑參詩「田中關白室。林下閉玄關」白居易竹

閣詩「無勞別修道。卽此是玄關」方子詩「律儀通外

學。詩忠入玄關」など見ゆ。されば此稱ははやく五

山の禪刹にて云ふらせしが、俗家迄推移しにや。武

門には忌はしきが如き稱なり。

○げんこ 阪山石云「古老の説に、民間の卑諺

に、五つの數をげんこと云事は、阮古切五なれば也と云り。果して然りや否はしらす」とあり。

○献上 後漢書三十下「班固傳」或連日繼夜。毎行

巡狩。輒獻上賦頌

○見臺 懶架 中昔の調度の中に懶架と云物あり。今の見臺也。然るに雅游漫錄其他の書どもにも、此を竹の書架也と記せしより、見臺と懶架とを作り、臥ながら書を視けるより、則懶架と名づけたる事、彼國の書に見ゆ。

こノ部

○小某 春塘故實云『禁中にては君の御寵愛な

さるゝ者には、小の字をつけ給ふとなり。小宰相、

小侍從、小左衛などあり。これ大宰相、大侍從、大

左衛と云あすて、それに對するの小にてはなし。小

とは親愛し給ふの意なりと云。又武門にては、本妻

腹にてなき子に小の字をつくる事あり。小太郎、小

次郎などの類なり。新田小太郎も妾腹の一一番の子也。

又後太平記二條大宮二度合戦の段に、山名小次郎討

死の處に「これは先年和泉國土丸の城にて討死し給ひし山名右馬頭の子息、陸奥守の甥なり。母は妾人

の腹に出來給ひしを、父討死の後取立し人もなくて

母の養育にて但馬國に坐しけるを、氏清これを憐みて呼出し、猶子に定め置れたりと云この類ひ、猶多かり。合せ考ふべし』吉部秘訓抄云『建久四、十一、五、同記云。『今日仁和寺小宮_{御子高倉院}御灌頂後朝也云云』物語書等にいまだ元服せぬを、小君と云り。これに小宮とあるは、皇子の童に坐ほどを申すなるべし云云』今按に、これにもいろくあるべし。小式部内侍などは、親の式部に對へたる小なり。又小金吾、小宰相、小君などは、幼稚よりそばつかへせしに、其身小なる故に、小某と呼給ふさまに見ゆ。小舍人童の類ひ也。又右の小宮などは、今俗に小檀那、小若衆、小小從の類ひ也。

○某子 女の名の下へ子を付て呼ぶも古き事也。書紀、用明卷に「葛城直磐女廣子」と見ゆ。是よりこのかた貴女には常のことなれど、さらぬ自餘の人々にも多く附てよべり。今の世にも女子の上には「あのこ」「この子」「よい子」など、やゝさだ過る後迄も云める。凡て女は若きを愛るゆゑに、おのづから此稱あるか。竹取物語に「内侍中臣ふさ子にのたまふ」大和物語に「とし子」同「あやつことし子の

母の養育にて但馬國に坐しけるを、氏清これを憐みて呼出し、猶子に定め置れたりと云この類ひ、猶多かり。合せ考ふべし』吉部秘訓抄云『建久四、十一、五、同記云。『今日仁和寺小宮_{御子高倉院}御灌頂後朝

「よぶこの内納言」源氏、胡蝶「みる子_{玉がづらは}」などの類、猶多かるべし。かゝれば他よりよぶ稱にて、自ら某子と云はひが事かとおもふに、某麻呂など云まろの如く、本親の呼ぶ唱へのまゝに、人もよび又自称にもせしなるべし。

○こいつ 「やつ」及「きやつ」を見よ。

○某講 _{ナニコウ} 後拾遺、釋教「山階寺の涅槃講」同々

「故土御門右大臣家の女房車三に乗あひて菩提講に參りて」續詞花、連歌「日吉社の禮拜講と云ことに」同々「前中宮の越後あみだ講おこなひけるに」拾玉七十八「文治六年二月廿八日山王講」源氏、松風「み寺にわたりて、月ごとの十四十五日つごもりにおこなはるべきふげん講、あみださかの念佛の三昧をば、さるものにて」河海「十四日普賢十五日阿彌陀晦日釋迦」繁花疑「六波羅密寺雲林院のばさつ講」同々「ことのをりふしむかへ講などにも」同御著義「人々はて講とて經藏鐘樓などまで、所々にうるはしうともしわたして」新勅撰雜「報恩講と云事おこなひ侍りけるに、なき人の名をかきつらねてよみ侍りける」詞花雜下「舍利講のついでに」拾玉七「夏日舍

利講演。次同詠十如法文和歌云云」此外舍利式とも舍利會ともいへる多かり。

○勾引 「かどはす」を見よ。

○後架 小便所 園太曆、延文三年九月四日

の處に「小倉殿御事云云。昨日酉刻自後架謂小便所還御之後。絶入云々」とあり。今世に廁をこうかと云ことあり。此後架なるべし。但し廁も河屋の義

なれば、後架ももとは河架の義なるべきにこそ。

○後悔さきにたず 潤山驚策云「可惜一生空過。後悔難追」

○孔子も時にあはず 莊子曰「孔子再逐於魯

窮於齊。伐樹於宋。圍於陳蔡。不容身於天下。」史記、儒林傳「孔子年七十餘君無所不遇」注「後之記者失辭也。按家語等說。則孔子歷聘諸國。莫能用。謂周鄭齊曹衛陳楚杞莒匡等。爾縱歷小國。亦無七十餘君也。」

○口狀 口上 三代實錄十三宣命の中に口狀

と云ことあり。今世に口上とかくは、物語書、記録に几帳を几丁、本性を本上とかくたぐひなるべし。

○口錢 口^{コウジンカ} 錢 古今原始七漢元年貢禹議。古無口錢。起

武帝征四夷重賦于民。產子三歲則出口錢。故民重困。至于生子輕殺。甚可悲痛。宣令男七歲去齒。乃出口錢。年二十乃算。天子行其議。產子七歲廻出口錢。自此始云云」とある。これやがて口錢と云文字の出所とはすべけれども、此間に云所は既に久部口米の條に云が如くなり。見合すべし。(猶「うはまいとり」をも参照せよ)

○こうち 小路也。催馬樂、大宮に「おほ宮の西のこんちにあやめこんだり、さやめこんだり落葉

之上「あまた火ともさせて小路きりに辻にさしあひぬ云々」

○江南の橋江北にうつせば枳となる 周禮云「橘

踰淮北爲枳」說苑云「安子曰。江南有橘。齊王使人取之。而樹之於江北。乃爲枳。所以然者何。其土地使之然也」

○紺屋の白ばかま ものごとを人のためにしてわがためにせざるにたとふ。說苑云「良醫之子多死於病。良巫之子多死於鬼。」

○合力 積力と同じく、ちからをあはする也。

そは何事の上にも廣くわたる語なるを、俗に合力と

いへば、金錢以て困窮を救ふ一方に多くいふ詞とな
りこしは、重き方に奪るゝおのづから勢ひ也。後

漢書三十七班超傳「今可遣使。招慰與共合力」

○こえる 「ふとる」を見よ。

○五更 「ゴチ」

更點は夜分に局る名也。其夜

の長短に隨て均く五つに分て、一更、二更、三更、

四更、五更と唱ふ。其更を均く五段として、一點、

二點、三點、四點、五點と云也。冬至の時節は夜長

ければ、更點も長し。夏至の時節は夜短ければ、更

點も短し。點或は唱と云、又籌と云。世俗寅の一點、

辰の一點と云。されども一更に五點あるを知て云は

稀也。

○こたな 「丸刀」

つかふ 新撰六帖、知

家「今はわれまろばにとげることがたなのよにつかは

れぬ身とぞなりにし」

○ごき 今賤き者の食器にごきと云名のこりた

り。乞食のごきに錢をいれてなど云が如し。こは盒

器なり。古くは高貴の人の御ものを専らいへり。落

窪一之下云「御盒器をだに北方にきこえとり給ひて

き」

○こぎあひ 新撰六帖、三、信實「ともふねは
つくしもいせもこぎあひのおなじとまりにうきねを
ぞする」

○こく 稲をこく、豆をこくなどいふこく也。

伊勢物語に「いにしへのにはひはいづらさくら花こ
けるからとも成にける哉」此外歌に「袖にこきいれ」
又「もみぢこきおろす」などよめるも本此こくより
出たる也。

○ごくろう 「ねぎらふ」を見よ。

○こけ 今之俚言に「人をこけにする」「こけに
成てゐるがよい」など云ことあり。長明無名抄上あ
まりにこけすぎていかにぞや「かゝるこけうたよま
る、ぞよ」

○九重人 夫木、六春平祐舉「くものたつやへ

山ぶきの花ざかりこゝのへ人にをらせてしがな」

心得也。山家集、上「こゝろ得

つた」すちに今よりは花を、しまで風をいとは

ん」後拾遺、雜二、土御門御匣殿「こゝろ得つあま

のたくなは打はへてくるをくるしと思ふ成べし」

○心得がほ 夫木抄十四、秋、西行上人「こよ

ひはとこゝろえがほにすむ月のひかりもてなす菊の

白露」

○心おごり 元真集「もゝしきにえられてうつ

るをみなへし心おごりのどかせざらん」

○心がより 金葉集、春歌、隆源法師「こゝろも

手にひるはちりつむさくら花よるはこゝろにかゝる
なりけり」

○心がはり 六百番歌合、慈鎮和尚「しばし

るけさのまたねに見つるかなこゝろがはりの行末の

夢」

○心がまへ 狹衣、二上「つれな御心がまへ

や」源氏、若菜「のこりのよはひゆたかにふべきこ
ころがまへもになくしたりけり」空穂には殊に多く
所々にあり。

○心けがし 菊花御賀「ありなれし契もたえて

今更にこゝろけがしのちょといふらん」

○心ごはく 清慎公集「むらさきにさげどもな

にか菊の花こゝろこはくはをらんとぞおもふ」

○心だくみ 二條大貳集「夏めせと心だくみの
はかなさは斧の音してえこそつくさね」山家集、下

「山くづすそのちからねはかたくとも心だくみをそ
へこそはせめ」

○心だましひ

空穗、俊蔭「一世の源氏の心だ

ましひ人にすぐれ給へりけるを得て」同、藤原君「か
ほかたち心だましひ」同、祭使「しづかなる人のこ
いろだましひもなく、なきまとひ給へば」蜻蛉日記
上「かたちとも人にすこゝろたましひはあるに

もあらじ」

○心づかひ

忠見集「ある女の出にけるに云
々「人になります心づかひもあるものをたよりなくてふ

事をつくさん」かへし「いづこにか尋ねてあはん身
を分て君がゆるさぬ心づかひを」菊花はつ花「わかな
つむかすがの野べに雪ふれば心づかひをけふさへぞ
やる」萬代、戀三、太宰帥親王敦通「せきこえてけ
ふぞとふやと人はしるおもひたえせぬこゝろづかひ
を」

○心とゞむる

久安百首、實清朝臣「くれの秋

月はこよひのせきなればこゝろとゞめてたれか見ざ
らん」

○こゝろなし

源氏、若菜に、いぬきが雀の子

をにがしたる所に「例の心なしのかゝるわざをして、さいなまる」こそ、「いと心つきなけれ云々」

○心根 忠岑集十三左長歌「上略侍山ごとに、うつろひしありとみんとぞ、いそぎこし、何かはさらにはりければ、色のみどりも、さしながら、心根さへぞ、かれにける云々」

○心のおに 紫集「なき人のかごとをかけてわづらふもおのがこゝろのおに、やはあらん」謙徳公

集「わがためにうときけしきのつくからにかつはこゝろのおにも見えけり」源氏紅葉賀「宮のみこゝろのおに、いとくるしう」列子諺云「疑心生闇鬼」とある如く、我身のきずを、いまだ人はしらねども、我心より思ひなして、人の知たらんやうに思を云。天台範云「心迷生闇鬼」

古歌に「ひかれなば

あしき道にも入ぬべし云々」鴻山警策云「如惡馬不以^{シテ}轡將^{シテ}當牽人^{シテ}、陷^{シテ}於陥^{シテ}」必不^{シテ}相賺^{シテ}」

○心のかけ 山家集上「ものおもふこゝろのたけぞしられけるよる／＼月をながめあかして」同下「物おもふ袖に心のたけ見えてしのぶしらぬはなみ

だなりけり」

○心のはし 隆信集、戀六「にしにひく心のは

しはふみをめぐわたらん日こそしらまほしけれ」

○心のゆるぎ 古事記、下「大君の心をゆらみ」萬葉八十九「さゆり花ゆりといへるは」十一丁十八十八また二十等に見ゆ。

○こゝろばせ 古今集、物名「かりそめに時まつまにぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつゝ」檜垣集に、宇佐くにとしがうた「君ならぬ人のよの末いかにせんこゝろばせこそすみかなりけれ」檜垣かへし「こゝろばせすみかとならばきみはさはこゝより外にゆく所あらじ」

○心ほどの世をふる 曾我物語に「何かさのみをしむべき心ほどの世をふといふぞや」

○心まかせ 爲忠朝臣集「故郷にきてもかへらば時は今紅葉のにしきこゝろまかせに」

○心のかけ つくるこゝろ見えなるあとなれど見てもしのばん人やあるとて」後拾遺、藤原惟長「世のつねにおもふわかれの旅ならばこゝろ見えなるたむけせましや」

○心ゆかし 落窓、一之下「こゝろゆかしにた

まへば、さすがにわづらはしくて云々」林葉、「こ
れやこのまたれくしてほとゝぎすこゝろゆかしのさ
よのひとこと」夫木抄、舟六、登蓮法師「あはぬよ
の心ゆかしの手習はこひしとのみぞふではかゝる
」

○こゝろを師とす

新撰六帖、衣笠内大臣「お

ろかなるこゝろの師とはなりぬともおもふおもひに
身をばまかせじ」山家集、下「おろかなるこゝろにのみ
やまかすべき師となることもありがたき世に」
○こゝろを師とせざれ 陸象山語錄云「學者大
病。在於師、心自用。師、心自用。則不能克己。
不能能聰言」新撰六帖「おろかなる心の師にはなり
ぬともおもふ思ひに身をばまかせじ」

○心をもらす

頼政集「雨もよに思ひ出じとお
もへどもおもふ心をもらすけふかな」かへし「雨も
よにおもふ心のもりげにやあやしくなる、わがたも
と哉」

○心をやく

萬葉、七三十一「やきたらぬかも我心、や
く」十三十四「わが心やくもわれなり」一入「おもひ

ぞやくるわが下情」ともよみたり。

○こさ

田舎にて木の蔭をこさと云て、田畠などに喬木の掩ひ障りて、陰となるをこさになるとい
へり。拾遺愚草、上「しのぶ山こそさちのおくにかふ
わしの其羽ばかりや人にしらる」夫木にもこれか
れ見ゆ。

○ござ

蓮の美を今ござと云は、御座也。然る

に或書に「うは敷をごさと云は臥坐也。これを寝臥
坐と云は重言也」と云るはたがへり。昔は下ざまの
民屋も、常は皆板敷にて、家の者の居る所のみ敷
物しきつれば、客ある時は其御坐をまうけしより、
其敷物に御座の名の遣りし也。萬葉集に「我疊」とい
ひ、貴人のおましに今もいはゆる二疊臺と云あり。
又中古の書におましまうけの事あまたいへる、合せ
て知べし。

○小坂

堀川百首、公實「ますら男が小坂の道

も跡たえて雪降にけりころもかせやま」夫木舟三雜、
公朝「かたそばの小坂くだりの柴車としめかねたる
春のくれかな」又十三、秋、定家「おのづから秋の
あはれを身につけてかへるこざかの夕ぐれの空」

○「ござかし 小賢也。催馬樂、此殿奥に「われをこぶらしこざかこゆなるや」とある、小賢肥にて、肥は今之俚言に「くらひふとる」と云が如し。

○ござる 御出なさる おはします

在の約也。記傳、明宮段歌、伊麻湏の釋曰「行坐

御座

ことをいいますと云るは、萬葉三三十に「好爲而伊麻世ハトホグキヒガイ」十五丁「多久タク」

荒其路ハラキノヲチ」四三十に「彌遠君之伊座者ミトホグキヒガイ」十五丁「多久タク」

夫湏麻新羅邊伊麻湏ハスモハシラヘイマハス」など多く見ゆ。此はたゞ坐を

伊麻湏と云と意は異なれども、言は「なり。其證は

古今集詞書に「法皇西川におはしましたりける日」

などある類多きは、行坐ことを、おはし坐と云り。おはし坐もたゞ坐を云と同じ言なればなり。又今世の

言に其處に其座らせらるゝ云は、其處に坐と云こと

其處へ御座らせらるゝ云は、行給ふと云ことにて、

意は異なれども、言は「なり。されば此は坐ことに

云言を、行坐ことにも通はし用ること、古へも中昔

も今世もおのづから同じことなりけり。又俗に其處

に御出なさると云は、坐と云こと、某處へ御出なさ

ると云は、行坐ことにて、是はたゞ一言を通はし用る

例同じことなり。萬葉十七に「和我勢古我久爾幣麻之奈波」とあるは、伊を略きてたゞ麻之とも云り。これらを以ても思ひ定むべし」と云り。此説いとめ

でたし。今の女文に居坐にも、出坐にも、入坐にも

凡て云々おはしますとかける、是も同じいりますを往

坐と云し説は、實にわろきなり。

○こじうと 「しうと」を見よ。

○こじうとめ 「しうと」を見よ。

○こしかくる 爲忠集「かはやなぎゐせきにこ

しを打かけて流るゝ水にかみあらふとか」

○こじき 空穗、藤原君二十「さがのゐんの牛飼

云々。つゝみうちてあそびす。かうせちとてはこじきするまねをする」

○こしき 五色にて、瓜を云。管見記「嘉吉元

年六月廿四日己丑。自朝降雨。五色甘籠進上」とあ

る、瓜を指るにて、此外にも多く見えた。餅を十

字と云類なるべし。

○こしだき 産婦の產に臨む時腰を抱くを云。

室町殿御産所日記云「承享六年二月十三日。御腰懷

○こじとみ 「しとみ」を見よ。

○こしのかま 爲忠集「おひしげる森の夏草かる人のわけいるこしのかま見えぬまで」

○こしのべて 源氏須磨わたくしさまにこしのべて、など物のきこえひがくしかるべき」花鳥説「蟻居せる人の外へ出ありくをば腰をのばすと云也。

左大臣致仕の表を奉て、隱藏の由を申ながら、私には又ありくといはれんもの、聞えをはかる心也」

○こしふたへ 夫木、丹二、雜、藤原經業行「おいらくのこしふたへなる身なれどもうづゑをつきてわかなをぞつむ」萬代、新六「わかなを奉るとして、

東三條入道關白前太政大臣「わかなつむこしはふたへに有ながらのべの小松をたのみてぞ引清輔集四

位の正下したりける比ほひ、わかき人々の侍りければよめりける「けふこそは位の山のみねまでもこし

ふたへにてのぱりつきねれ」尙齒會序「八十坂にかへりてこしふたへなるどち」大和物語「此おばいといたうおいて、ふたへにてゐたり」

○こしやく 小兒などのおとなめきたる事するをこしやくなどいふ、此こしやは、物語書にいへ

るさくじりといふに小をそへて「こさくじり」といふこと歟。又古事記中卷に「愛々志夜胡志夜。此者伊勢能布曾。阿々志夜胡志夜。此者嘲喰者也」とある此胡志夜の活きたる言歟。

○こしやくなやつ 「あまのじやく」を見よ。

○御所柿 或書云「大和國の平柿を、畿内にて御所柿と稱す。此柿は元來其國の巨勢の莊より初て出せし故、其地名を以て巨勢柿と云けるを、ごせよがきとは訛れる也。然るに其名もよろしく、且舊都の國にもありければ、其心得たる人も附會して、御所柿とはいひなしたる也。古く大和產物を記せし書に、巨勢柿とかきたり」とあり。

○御所様 一中原康富記に、伏見殿をも大將軍をも御所様といへり。又「嘉吉二年十一月廿六日。參_二伏見殿候宮御方御讀。大御所有御出座」とも見ゆ。

大御所とは貞成親王、後謚後崇光院を申せる也。

○こしらへ 今物を作爲するをこしらふるといふ。又取つくらふをも然云。むかしも同じこと也。

撰集抄二「おちつくべき方をこしらへ侍るべきとて」

同同「此所にいほりとかくこしらへて」しのびね上

「御装束などしらへ給ふ」増鏡くらのさら山「千葉屋といふ所にいかめしき城をこしらへて」などある是也。後拾遺、化城喻品、赤染衛門「こしらへてかりの家の道にやなほまどはまのやどりにやすめすばまことの道をいかでしらまし」これは方便也。いひもてゆけば皆ひとつ意におちぬべし。

○腰をめぐる 類基朝臣集「ゆふ帶のとくはあれともわかれなばこしをめぐらん程の久しき」

○腰折歌 明月記「十月十二日戌時許。自院給

五首題有召。即扶病騎馬馳參。攝書腰折歌於中嶋神殿有披講。家隆卿の詞云「今時の歌はよき歌といへども、皆腰の句折たり。いにしへの歌の腰のつよくなづきたるを見れば、ほこりがたし云々」源氏帝木には「腰折文」といへる詞も見ゆ。

○御新造 新艘 岡田有信が咄桀云「或書曰、妻を御新造と云は昔よりありけん。鰐川殿中日記にも見えたり。よき人は先妻をよぶには、必妻の住居すべき家を新に造作せし故に、其家を指て御新造と云習はせり云々」といへる、此説よろし。古事記、

上、湊佐之男命稻田比賣と娶坐んとして、宮可ニ造

作一之地求とある、傳釋云「凡て上代に婚禮するには、先其屋を造りしこと、見ゆ」とて、二柱神の穴尋殿より始て、出雲風土記に「大穴持命將娶給爲而。令造屋給故云三八野」とあるを引れたり。萬葉にも「枕付妻屋」と多くよみ、又九卷には「ふせやたて妻どひしけん」ともつけたり。此等の事は雅言部と見合せて知べし。さて遊女に云は、新艘の意歟。昔は船を栖としつれば、其頭より云傳へたるにもあらん。

○こす 「よこせ」を見よ。

○小すな 夫木、廿五雜、元輔「みやはまのいさごのこすな我君のたから位かぞへ見むかし」

○こすり あてこすり

具也。己須利和名抄に「錯子古須利。鑑別名又摩也」とあり。今物を磨ることをこするといひ、又人をかすめていたむる事をあてこするなど云も、言の意ばへ是と同じ。

○こせ／＼ぬすみ 太秦牛祭々文に「僧坊乃中仁忍入天物取留世古盜人女云々」此世古に小の字を添て云也。

○こそ 「某屎」を見よ。

○こそくしのびね上「こそく」として出給ふ」愚管抄七「こそくとうせぬるうへ」今昔廿七十八「孺子ノ迫ノ塵許有ケルヨリ此板こそくトシテ入ヌ」古本今昔五「コソヌクモノアリ」

○こそぐるねつい

字鏡下に「撃櫛櫛己曾久留」とありて、百日紅木の少しなでゝも梢のゆらぐを「こそぐつたいの木」とよべり。古事要訣云「摩訶止觀の中に珍らしき字には、撃櫛櫛己曾久留などかやうの字多し」とあり。今田舍人の言に物に念を入れ丁寧にするを、ねついといふ、此撃櫛櫛の意なるべし。

○こそげ宇治拾遺三十六丁に「銅こそげてくはせ

などして」とある、銅の字心得す。同卷上三十丁に「小桶に入てよるはをさむ。あくればこめくはせよ。銅茶にこそげてくはせなどすれば云々」とある此茶は菜の誤なるべし。今も薄餌すりゑなど、小鳥銅ふ人のいへば、飼菜は摺餌にしてくはするなるべし。さらば右の銅は飼の誤にて、その下に菜の字を脱せるなるべし。あからねには有べからず。猫に銅けづり

てくはすれば人の如くもの云よし、五雜俎に見えたれど、小鳥にくはせん事いかゞ。こゝはたゞこそげと云言の用にて引たるなれどついでに云也。

○こそで 小袖也。金葉、雜上「人のもとへ、小袖をつかはすとて、天台座主仁光「あはれまんとお

もふ心は廣けれどはぐ、む袖のせばくも有かな」言塵集序「あらさまやと思は、小袖をきばや云々。雲井

のみのりきぬかづきのやうにこそでをうへにかづきて」山家集廿一長明無名抄下取古歌候盛衰記四十五「祿の小袖ニ白帷取具シヲ」曾我物語三「箱王には紅葉に鹿書たる紅梅の小袖に大くちばかりぞきせたりけり」

○子だから

萬葉五八「しぴがねもこがねも玉も何せんにまされる寶子にしかめやも」十六丁「蟻衣之寶之子等蚊」相摸集に「何事も心にあかぬ身なれども、子のたからこそまづはほしけれ」

○こたつ 今の大爐は中昔の比、地火爐と云し物也。巨爐と云名は文明のころまでも物に見えず。地火爐は宇治拾遺に見え、又奥州後三年記に「永保の比陸奥に地火爐つき」と云こと記せり。

○こだま 世俗に云こだまはいにしへの山彦

也。又今も山中の人は天狗を指てこだまと云る處有。源氏、夢浮橋に「天狗こだまやうのもの」といへるをふときけば、天狗と木靈とは異なるやうなれど、當時の世にも天狗とも木靈ともいへりし故に、たゞ何となくつらね云るにて、實は一つものなるべし。同、手習卷には「きつねこだまやうのもの」とある條の河海抄釋云「樹神木神魑魅魍魎」「大日經空谷響」左傳注曰「魑魅山林異氣所生爲人害者也」今昔廿七三十木等モ皆久シクナリテ樹神モ住ヌベシ」保憲女集「ふすとおくととこよひするなげきにはこだまいくる物にぞ有ける」これは今俗に云山彦のやうに聞ゆ。

○こちく ちこく 今懸にもの云をこちくと實意になどいひ、又これをちこくとも云めり。明月記「天福二年八月六日亥時計。人々勞心様り來奉公之陰德被召入二人爲家被免拜見宮もこちくと被仰。聊被御違例云々」又此こちくを今ちくとも云は、訛りて顛倒せし歟。又それは近々にて別語歟。

○こちよく

親玉

類聚名物考云『江戸の青

樓吉原にては、雛妓を禿カムロといへども、他の倡家にてはさはいはずして、こちよくと云。是は小玉の音轉也。白樂天が長恨歌に、方士が楊貴妃の魂をたづねて、蓬萊へ至りし所に「金闕西廂叩玉扇」轉教ミ小玉報「雙成」と見えたる、小玉は即楊貴妃の小童にて俗云腰元女童也。これ禿と同じ者なりければ、遊士の好事、それを謡曲に作りてこぎよくとうたひけるが、訛りてこちよくといひ習はしたる也。母妓を親玉と云に對へて知べし」とあり。此説おもしろし。されど青樓にてはもはら禿とのみ云て、却て他所の小倡家にてこちよくと云を思へば、たゞ小女子の義ならんか猪口をチヨコともチヨコともチヨコとも云が如し。倡家ならぬ家にてもいひるなかなどにてもいへば也。又親玉と云稱も母妓には限らず。卑き者は、親をも主人をも、職人の棟梁又芝居役者等の上にもはらいへり。玉はたゞ美稱なるべき歟。

○こちよひて 今云所は近く倚てと云意、昔にいへるは近代といふ意也。榮花月宴一丁「こちよりてのほどをそるべき」大鏡三「こちよりて大納言のむすめの后たつ例なりければ」

○小附飯

二水記「永正十六年十一月五日。於御所各有御小瀆。御相伴也」

○ごつくともむ がぶくのむ 今世の言に物の音ひよきを詞にそへて、がぶくのむ、ごつくともむなどいふも、本居古語也。萬葉十六^{二十}九^十に「辛

鹽爾古胡登毛美」十四^丁「筑波禰爾可加奈久和之能禰乃未乎可」大祓祝詞に「速開都比咩止云神持可、呑氏武^ニ和名抄に「嚇加々奈久」などあり。

○ごつて 高き木の枝に懸りて、一むる茂る物を、東國の田舎にてごつてと云。こはもしこやでを訛り傳へたるにはあらじ歟。萬葉十四^{二十}四^十に「於曾波夜母奈乎許曾麻多賣牟可都乎能四比乃故夜提能安比波多我波自」とある此故夜提を一本に依て、諸抄小

枝の誤としたれど、おそはやもといへるを思へば、猶今云、ごつての事めきて聞ゆ。年々此ごつてと云物のおふるを見るに、年によりては稚の若葉より先たづ事もあり。又おくる、をりもあれど、大抵十日と

もおくれ先だ、す、互におひすがひて芽ぐみつればかくはよめるなるべし。さて是が名を保興とも云。中古の程には保夜ともいひて、寄生の一種なれど、

其古名は故夜提と云しなるべし。又今云、ごつても四

國の邊にてはくつてといふよし、土佐の人云り。もしさらば郭公をくつて鳥といふも、此故夜提の芽ぐみ比に必ず鳴ゆるにいひけんを、後に沓取の説をそへつけたるにもあらん。猶よく考へてよ。

○ごつてい牛 今、淀、鳥羽などにつかふ大牛を、ごつてい牛と云は、古言のことひうしを訛れる也。萬葉九に「壯牛」十六に「事負之牛」などよみたり。和名抄に「牛和名字之。特牛俗語云。古度比」とあり。殊負にて、物を殊に多く負よしの名也。

○ごてた 葛飾郡五ヶ村と云るあたりの一郷にては「いひごてた」「しごてた」とやうに、云ことあり。「いひごてた」は「いひごとした」と云意、「しごてた」は「爲ごとせられた」と云意也。源氏、東屋に「帝の御くちづからごて給へるなり」とあり。此言書紀に詔、令等の字をノリゴチテと多く訓るも、告言爲而と云約言なり。右源氏其他の物語書に「ひとりごつ」「さこえごつ」「まつりごつ」などいへるも言爲を約めて云るなり。

○ごてん 「ごかう」を見よ。

○事ありがほ 堀川百首、國信「春の田をことありがほにかへせどもれるわらびはたばねだになし」同「立かへる道もはるけしよぶことありがほに人なとゆめそ」

○事が出来た 「事とある」を見よ。

○こときる 言斷にて、「今云いひきる也。長明無名抄下「此あらそひ、やすくこときるべきやう有」

○ことぐし 新撰六帖、「光俊「夕立のみ

ねのときは木おとづれてことぐしくも過る風かな」基俊集「山城の水田のこなぎおのれさへあなことぐしわなすさめそ」千載、俳諧、俊頼「うの花よいでことぐしけしまの波もさこそは岩をこえしか」

に「事之あらば」また四二十「わが爲に妹もことなく妹が爲我も事なく」猶此等の事は同二十五丁、又三十九丁、十二三十九丁、十九三十九丁、五三十七丁等に出。

○ことづて 「つてごと」を見よ。

○ことのはか 萬代、秋下、惠慶法師「高砂のをのへにたてる鹿のねにことの外にもぬる、そでかな」新古今雜中、舟後「山さとはよのうきよりもすみわびねことの外なるみねのあらしに」千五百番歌合、嘉陽門院越前「冬きぬとおもふばかりのあさばらけことの外にもかはる空かな」異本拾玉、百首歌冬、十五首中「ことの外なるなみのおとかな」「こと

の外にも春めきにけり」

○詞づかひ 連歌俳諧者の追々に新規流行詞を遣ひて、たとへば「ことよひの月」と云べきを「月こよ

ひ」と作り「をちこちの野べ」と云べきを「野べの遠近」とやうに顛倒せる句の多くなれるをいましめて或書云「かゝる事、東花坊が十論にも、畠山左衛門佐は歴々の諸侯なれど、一轉して山畠の助左衛門といへば、邊土の農夫が名と聞え、小兒の習ふ商賣往かくきたるはことさらにはあらじなどいひて云々」

○事とある

事が出来た

萬葉四十五丁十六十一

來を轉じて、往來商賣といはゞ、道中飛脚か、雲助
かと聞ゆべし。是をおもひて詞は順を守り、奇異の
句を作るまじき也」と云る、こは卑き俳書なれども
和歌もやうへ此さかひに落來めれば、いさゝか引
出おく也。

○詞のこる 爲忠朝臣集「あとゝめてわかる、
よりもはかなきは、詞のこりて明るしの、め」

○琴ひき 琴を彈人を直にことひきといへり。

萬葉、十六丁に「歌人跡和平召良米夜。笛吹跡和平
召良米夜。琴引跡和平召良米夜」

○ことぶき 御壽幾 大殿祭祝詞に「言壽
古語云、許止保企、言壽詞如今森鶴之詞」古事記、訶志比宮
段に「言壽」書紀、持統卷に「壽詞」などある、此こ
とほぎの音の轉じたる也。さて此等の壽字はたゞ祝
賀の方に取て、又壽字の偏を省きたるもあらん用ひたる
なるを、後世には貴人の年齢を御壽幾つと云など
は、其理り叶ひがたし。

○事もおろかに 堀川百首、俊頼「秋の田にも
みぢぢりしける山里をこともおろかにおもひける
哉」

○子どものまつる社 夫木、冊四、神祇、上西門
院兵衛「うなるごがかきねにいはふをやしきにおも
ふことだにならばたのまん」

○ことわざ 古き代の諺は、皆雅言部に出して

ことわざと云言の意も解つ。こゝに中古の諺と近昔
の諺を見るに隨て少しづゝ出す也。保憲女集「おほ
ぞらを紙一ひらにとりなしてかくとも『沙石集五』握

レルコブシエメル面ニアタラズ」同五「鶴ノハギモ
切ベカラズ、鳴ノハギモツグベカラズ」空穂、俊蔭

「さきにたつかりぞ有けん」同、藤原君「だからに
はぬしよく」寶は持主をえり 嫌ひするをいふ 源氏、胡蝶世のた「後のお

やをそれとおばいて」河海云、後の親を親と 赤染集「木

をはなれたるさるもなくなり」竹取下「月を見るこ
とはいむ事」續世繼ほり川の「朝夕によそのたからを
かぞふる」堤中納言姫君帖「てふはとらふればわらは
やみせさすなり」空穗、祭使入學して「くろしあか

しのさとりなきが」蜻蛉日記上「たふる」にたち山
と立かへるときもあり」源氏、横笛「夢はよるかた
らず」同、若菜下いとづ「空に目つきたるやうにお
はえしを云々」此外にもいと多かれど、此類ひなる

は皆其所々に出しつれば、他は省けり。又近昔なる
は月庵醉醒記中卷に、宗祇法師が信濃國より記して
贈りたりとて載たるあり。其まゝにあぐ。「理もくう
すれば非になる」「狂言はいさかひのもとむ」「心ざ
しは松のはにつゝむ」「いそがばまれ」「居てとら
ん物立てとれ」「勝てかぶとの緒をしめよ」「しねば
いく」「小利大ぞん」「うやまへばしたがふ」「たのむ
木かげに雨がもる」僧正通昭の歌に「わひ人のわきて立よる
木の下はためのむ座なく雨そもりける」詞
花葉の歌に「雨こそはたのまばたのめた」「大なるものにはの
まとはおもはぬ人と見てなやみなん」
「ながきものにはかかる」と「まがれる木も
くねの便り枯たる木も山のにざはひ」「なほき木に
ち枉れる枝あり」高津親王御歌「なほき木にまがれる枝もあら
きのを毛をふき疵ないふかわりなき」
「りなきはひがむ」「いさかひ過てのちきり木捧」「詞
多ければしなすくなし」松月歌に「郭公人の詞の多かる」
「犬より人」「どううてばかほにかゝる」「血をもつてち
をあらふ」「人をふみてはねいられぬ」「鶴のまねす
る鳥は水をのむ」「けらはらたてばからずよろこぶ」
「木のぼり川立馬鹿がする」「雨ぶりて地かたまる」
「人の事いはんよりは柿のさねをかぶれ」口を開よとの
かせぐに貧乏おひつかす」「うやまへばうやまはる

「よわきものをれす」古歌に「ゆによわきをおのが身
にしめて柳の枝に雪なれもなし」
「くらげもほねにあふ」「餓鬼も人勢」「地獄もすみ
か」「惡につよければ善にもつよし」「くせある馬に
のるもあり」「人くはぬ馬耳する」「をんないしう
のめきらふ」「赤犬で狐おふ」「木に竹をつぐ」「出が
らかひの入がらかひ」「そんするも時のはりあひ」
「へたのものすき」「やせものすこのみ」「よます
どちかすどち」「こぢきの友えらび」「順禮のつれ
うた」「れうしのふる物がたり」「ぬす人のとひつけ」
「しぬものどのとおす」「杉の木そだちのねこ心」
「松のそだちのさる心」「よわりめにたゞりめ」「うへ
見ぬわし」「後悔さきにたゞ」「織者は着ず耕すも
のはくはず」「霜の上の霜」「うたものがたりに歌を
忘れた」「寶の山に入て空しくかへる」「好事もなき
にはしかじ」「うてばひとく」「天しる地しる我しる」
「美女は悪女のかたき」「臭きもの身しらず」「人の一
すよりわが二尺」「人の子の死と我子のころぶと」
「ちるにはもれぬ山櫻」「角を直すとて牛をころす」
「鳥ない島の蝙蝠」「長居する鷺はひきめにあふ」「く
ぢらの尾にならんよりはいさゝの頭になれ」「老ぬれ

ばひかむ」「色あるものは必ずかはる」上かゝる諺は
人の口に傳へて、久しく世にのこるものと見えて、

右の中にも既に古きものに載たるものあり。今の世に
云とかはらざるもの多かり。是又物に見あたりおもひ
よりのあるにしたがひて、其所々に皆くはへつ。其
中にはこゝに載さるも多く出たり。

○こなす　　物を「爲こなす」「きりこなす」など
云。空穂、俊陰「いみじきおんな、をさなき子ども
うまごなどゐて、かうべをつどへて木をきりこな
す」

○小鍋　　夫木二、寂蓮「かゝりけるみのりの花
ぞ鶯はこなべをほしと何おもひげん」

○小波　　夫木廿六重之「こゆるきのいそのわか
めもからぬ身をおきのこなみやたれをよすらん」

○この葉沓　夫木、卅二、雜、和泉式部「庭の間

も見えずちりしく木のは沓はかでもたれの人かきて
みん」

○このは衣　後撰集、秋中「秋のよの月のかけ

こそ木のまよりおちばごろもと身にうつりけれ」

○この葉ざる　夫木抄、廿七、雜、肥後「あし

曳の山べにあそぶ木のはざるおもふ心ぞありてなく
なる」

○木の實拾ふ　夫木、十六、冬、寂蓮法師「あ
らし吹みねの木のみをひろふまに袖にもみぢの先た
まりぬる」

○此世ばかりのやどり　李白、春夜宴桃李園序云「夫天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。而

浮生若夢」五社百首、俊成「いつこをもたびならず
すやはおもふべきうき世ばかりのやど、こそきけ」

○こはいひ　強飯也。空穂、菊宴下六十「もみぢ
をりしきて、まつのこくだものもりて、くさびらな
として、をばな色のこはいひなどまるほどに」和
名抄に「強飯古ハ伊比」大神宮年中行事に「御強云々御廻
八種」など見ゆ。

○こばかま　「かたぎぬ」を見よ。

○強裝束　海人藻芥云「凡裝束の衣紋、上代は
沙汰に及ばず。鳥羽院の御代より強き裝束を用る故
に、衣紋の沙汰出來ぬるなるべし。上代は皆大裝束と
て、ふくさにて強くは不調也。然るに鳥羽院已前の
人の影を書とて、鳥羽院已後初たる強裝束の衣紋を

書たるは、繪師の不覺なり云々」

○こはすゝき　夫木抄、十六、冬、源仲正「わざもこや霜がれもせぬこはすゝき冬になるまで我になびかぬ」

○こはじとみ 「しとみ」を見よ。

○こひさめ　懲醒にて、見さめ、聞さめ、など
のさめ也。中務記「くみ見れど懲さめにこそなかり
けれおとにき、こし玉の井の水」隆信集「雪のあし

た中略させることなき文にて有しかば、懲さめにおぼ
えて」二條太皇太后宮大貳集「なみださへたぎりて
おつる夏のよの懲こそさむる方なかりけれ」

○こびつく　古事記上「故遣三天
菩比神者。乃媚附大國主神。至子三年不復奏」
云云今の俚言に「女にこびつく」とも「飴などの
物にこびりつく」とも云媚より轉じたるにや。

○こひのやまひ　金葉集、戀下、内大臣家小大進
「かくばかりこひのやまひはおもけれどにかけさ
けてあはぬきみ哉」

○小櫃の繪　土佐日記、二月十五日條に「山崎
のたなゝる小櫃のゑもまがりのほらのかたもかはら

ざりけり。うる人の心をぞしらぬとぞいふなる」今
江戸芝神明宮の社内にて、九月の祭禮中に小櫃に藤
の花のかたかけるをうるも、既に此程よりのことな
りしにや。

○こびん　小鬟也。しのびね記上「こびんなど
もうちふしみて、なきしほれ給へる」とあり。但し

御鬟なるか、定めがたし。御鬟ならばおんびんと云
へき歟。

○小普請　寄合　題聚名物考云「近來江戸の

制に、不動の輩を小普請と云になし給ふは、小普請
金出役のよし也。昔は修城造作の時一家より高割の
軍役にて、人足を出せしを、いつしかその煩をいと
ひて、金銀納になりき。それを過代に出さするなり
寄合と云も又同例の名也。西土にては是を修城錢と
云り。南史、齊武帝紀「初晉宋舊制。授官一十日輒
送脩城錢二千」これは官人に成たる時に出さするよ
し也。されどこのいにしへにはいまだ聞えぬ事ど
もなり」と云り。ついでに云。修造を普請といふこ
とは、佛家より出たる也。そは堂塔建るに普請勧
化して造るよりいひそめたる也。此事不部にも云べ

し。

○こぶち 「おし」を見よ。

○劫ハラをつくす 夫木抄、二十、和泉式部「もみ
ちばのちるもをしまじかめ山のごふをつくしてなり
もこそすれ」

○ごぼく 今道などのごぼくぬかるといふ
は、こほくを濁りし也。蜻蛉日記中五「七月三日に
なりにたり。ひるつかたわたらせ給ふべし。こゝに
さぶらへ、さん仰せ事有つるといふ。者ども來たれ
ば、これかれさりきて、日比みだれかばかりつる所
々をさへ、こほくとつくるを見るに、いとかたはら
いたくおもひくらすに云々」

○ごほくとなる 讀岐典侍日記、上丁右二十六「日
の御坐のかたにごほくと物とりはなす音して、人
々の聲あまたすなり」

○子ほどかはゆきものはなし 寶物集、五、兼輔
後撰「人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道に
迷ひぬるかな」後拾遺「五月やみこゝひの森の時鳥人
しらずのみ鳴わるかな」基俊月讀「いとけなきわが
子を七の里におきてこよひの月におもかけぞたつ」

太宰大貳重家「ひなづるの花の林にいりねればとび
立までにうれしかりけり」中納言雅頼「子をおもふ
道をぞいのるすべらざにつかふるあとをたがへざら
なん」

○こぼれ家 大和物語六十六段「雨にやさはりけ
ん、こさりけり。こぼれたる家にていたくもりけり」

○こま こまつぶり 児童の戯れに廻らすものをこまと云は、轉螺より出たる名也。大鏡五、「帝
をさなくおはしまして、人々にあそび物まゐらせよ
と仰せられければ、さまくこがねしろがねなど心
を盡して、いかなる事をがなと、風流をし出てもて
參りあひたるに、この殿は大納言行成こまつぶりにむら
ごの緒を付て奉り給へりければ、あやしの物のさま
や、こは何ぞと問せ給ひければ、しかくとなん申
し、まはして御覽じおはしませ、興あるものになど
申されければ、南殿に出させ給ひてまはさせ給ふに
いと廣き殿の内にのこらすくべきありきければ、
いみじう興せさせ給ひて、是をのみ常に御覽じあそ
ばせ給へば、異物どもはこめられにけり」今按に、
是は今俗に云ばいにて、近き比迄も田舎にては螺の

殼をめぐらして遊ぶ事ありき。即それ也。和名抄雜藝具に「獨樂辨色立成云。獨樂和名古末都久利有ノ孔者也」とある久は夫の誤りなるべし。都夫利は螺の延たる也。通雅戲具惜千々。轉輪戲也。南宋市肆記載。京兆兒戲之場。有情千々。蓋如京師之放空鐘抽陀螺乎。形扁丸有臍。以繩卷而放之其轉不已。謂之千々或其稱」

○こまい　今壁下を編みかくるを、こまいかくと云。盛衰記十二「柏梁垂木コマイナドハ、虛空ニ散在シテ」

○こまいぬ　桀花^{かくやく}_{藤つぼ}「御帳のまへのこまいぬ」空穂吹上中「ゐ丈三尺ばかりのしろがねのこまいぬ口あうて八するて」増鏡「正應三年三月四日五日の比、紫震殿の獅子狛犬、中よりわれたり。驚き思召て御占あるに、血流るべしとかや申ける」四民本傳云「或書に「狛犬の神前に在は、隼人の意也。今も隼人の犬吠をなすは其事也」といへり。按に非也。神前に在は戸前犬也。こまへのへの字を略せるにて、これ神戸の前の犬なれば、こま犬と云義也と先輩いへり云々。紫震殿清涼殿の御帳臺の中にこま

犬を置給ひ、御卽位の時、承明門に銅犬を左右に置せ給ふも、皆こま犬にて、神前に在と同じ心也。又几帳の傍にもこま犬有事、源氏物語、桀花物語、枕草紙等に出たり。何故にかく犬を置給ふなれば、恩をしり、仇をむくい、鼻利して、能氣を覗き、よく家を守りて、非常の物を内に入れ、正を守り邪をふせぐもの也云々」^上此内戸前犬の説、音訓混じ、其意もいかゞに聞ゆ。こは萬葉にまぞ鏡といふに「喚犬追馬鏡」と書によるに、こまとは來喚の意にて、常に犬を喚聲なるを、かく名となれる所は、即愛犬のよしならん。假寐夢第三に「これ犬にあらず。古來刻所皆獅子也」とて、外國の猛獸、獅子、白澤の事になしていへるは、なか〳〵にひが事也。凡て犬の児物邪氣を追ふ事、右の如くなれば、犬なるにうたがひなし。然るに其形の獅子の如くなり來しは、いかにも猛々しく刻せんとて、巧の長じ來しにこそ。されば至て古きものは皆犬也。世のうつるに隨て、獅めき來し事、其見る所にていちじろきものをや。(猶「いんのこ」を參照せよ)

○こまか　細小也。文には常なれど歌にも、頼

政集「あられふるかた野の草を打なびけこまかにかるや鳥立なるらん」夫木廿六、雜、西行人「そこす

みて波こまかなるさゝれ水わたりやられぬ山川のかげ」撰集にも「こまかにものをおもふ比かな」といふあれど今得おもひ出す。

○こまがたしやうじ 「しやうじ」を見よ。

○こまく 夫木、廿七、雜、俊頼「ひまもあらばをくろにたてる青鷺のこまく」とこそいはまほしけれ」

○こまつぶり 「こま」を見よ。

○こまどり 源氏、榊、「殿上人も大學のもいとおほうつどひて、ひだりみぎにこまどりにかたわかれたまへり」同、若菜下「皆まへしりへにこまどりにかたわけて」空穂、菊宴下「少將らうすけ殿の君たち、十ところをいつところづこまどりにとりて云々」河海抄云「かれこれをぬきとりて番ふなり」とあり。今俗に、大どりよりこまどりなど云もこれらの言より轉じたる歟。

○こまぬく 手を拱とは組貫にて、腹の上に兩手をやりちがへたるを云也。其貌吾身を抱くが如く

なりければ、古言には身抱とも、たむだくともいへり。

○こまよせ 犬ふせぎ 犬よけ 今世にこ

まよせと云ものは、昔は犬防、犬よけなどいへり。

又手すりと云もこれにあたれり。枕冊子六泊瀬詣所「人のみなみたる前をとほりゆけば、いとうたてあるに、犬ふせぎの中を見いれたるこちいみじく、たふとく云々」又云「たゞ局に出て、犬防にすだれをさらへかくるさまなど、いみじくしつけたるはやすげなり」更級日記「清水にゐて云々。御帳のかたいぬふせぎのうちに、青きおり物の衣をきて、錦をかしらにもかづき、足にもはいたる僧の云々」明月記「寛喜三年八月十九日、春日詣條「内外如新造佛壇立犬禦。前栽紫苑不似老翁之舊骨堂舍更新身朽損云云」同「天福二年八月廿二日云云。後同參拜見端立明障子御墓上置石倉立犬禦云云」大鏡三「夜からより御堂にまわり給ひて、うれへ申給ひしは、とよの、おまへば御堂の佛の御前に念誦しておはしますに、夜いたく更にければ、御脇息によりかゝりて、すこしねぶらせ給へるに、犬防のもとに入けはひの

しければ、あやしと思めしければ、女のけはひにてしのひやかに物申候はんと申を云々」此外蜻蛉日記源氏、宇治拾遺等の物語にも多く見えた。

○こまる 「わびすみ」を見よ。

○ごみ 薙芥の類をごみと云は、古言のごみを訛り來れるなるべし。萬葉七十「氏人のたとへの

網代君ならば今はよらまし木積不成友」十一五丁「千

江之浦回乃木積成心者依」十四三丁「鳴瀬ろにござのよすなす」十九九丁「卯の花をくたすながめの始水運縁木積成よらん子もがも」廿三丁「朝鹽みちによるこづみ」などある、これら言の本は、木屑より出て、海川池等の岸による凡ての塵芥をいへり。

○こみあふ 集合也。催馬樂、大宮に「大宮の

西のこんぢにあやめこんだり」とある、こはこみたりと云を、音便にこんだりとはいへるなり。今物の

充滿し群集するをこみあふといふは是也。

○こむすび 「せきとり」を見よ。

○某ごめ 今世に糟ごめに煮る、糠ごめ煎るなど云、こめ也。後撰春下、伊勢「かきごしにちりくる花を見るよりはねごめに風の吹もこさん」同

春中「けふさくら雪にわが身いざぬれん香ごめにさ

そふ風のこぬ間に」林葉一香「萬代、戀一、顯輔」高まとの山のたきつせ岩ごめに聲を聞いてもぬる、袖かな」萬葉十七「わがやどの花橘を花ごめに玉にぞあがぬくまたばくるしみ」枕冊子「むくろごめ」うつ

ぼ初秋「みさご池より立て三寸ばかりのふなをくひて居けるを云々。くひたるいをごめにいおとして」

○某米 今ゐなかにて麥米、あは米など云も、

古きこと也。空穂、藤原君に「橘をとりてなんまるりつると申さんといひつれば、あは米をつゝみてなんくれたるといふ」今昔廿一に「稗米ヲ粥ニ煮テ」などあり。こめとは稻の實のみの名にはあらず。五穀の穎をとりて、可く食せし名なりければ、然云べきものにぞある。

○こめかみ 和名抄に「蟀谷。針灸經云。耳以上入髮際一寸半有二穴。應而動謂之蟀谷。和名古米加美」

○米俵 或書曰「穀を一俵二俵といふ事、其義違へり。玉鑑海篇に「俵音標。俵散也」とあり。包みまとむる物に散す意の字を用れば也」とあるは、

なか／＼にひが事也。こは漢土にて米包、米囊など云包囊に對へて泥めるなるべし。此間にてば米を散米といひて、祝ふにも、禱にも、散すわざのある事既に字部うちまきの條に云つるが如く也。仍而囊靈に包みたるをも米俵とは稱するにぞある。彼國にも古くは此ならひありけらし。文献通考廿二市羅考廿二に米穀を「俵羅」と云る。此間の一俵二俵も此俵羅に准ふべし。

○こめになれ金になれ　夫木、卅、雜、爲家「秋ふかき山の夕霧、こめ／＼におのれも色やまづかはるらん」拾葉云「童の柴の葉を手にこき入て、金になれ米になれとやらんいふ木あり」それかといへり。今世の子どもする事也。

○小目の網　山家集「しらなはに小鮎ひかれてくだるせにもちまうけたるこめのしきあみ」

○こもそう　ぱろ／＼　婆羅門　徒然艸上段十五宿河原と云所にぱろ／＼多くあつまりて、九品の念佛を申ける。外より來たるぱろ／＼の、もし此御中にいろをし房と申ばろやおはしますと尋ければ、其中より色をしこゝにさぶらふ。かくの給ふは

誰そと答ふれば、しう梵字ボジと申者なり云々。前の河原へ參りあはん、あなかし、わきざしたち何方も見つぎ給ふな、あまたのわづらひにならば、佛事の妨に侍るべしといひ定めて、二人河原へ出あひて、心ゆくばかりにぬきあひて、ともに死にけり。ぱろ／＼と云ものは昔はなかりけるにや。近世にぱろんじ梵字漢字などいひける者、其初めなりけるとかや。世をしてたるに似て我執ふかく、佛道をねがふに似て鬪詮を事とす。放逸無慙のありさまなれども、死を輕くして少しもなづまざる方のいさぎよくおばえて、人のかたりしまゝに書付はべるなり」ぱろ／＼の冊子「虛空房と云者身のたけ七尺八寸、力強くしてゑがきたるかみきぬに、三尺五寸の太刀をはぎひる卷の八角棒を横たへ、一尺五寸の高足駄をはき、髪長く色黒し。ぱろと云者になり、一人の美女を妻とし。同行卅人諸國を行廻れり云々」異本ぱろ／＼の冊子「一人の女油を賣てわざとす。みめ悪しくして暮方ばかりに見えければ、世に暮とぞいひける。此女ある時蓮花を懷にいると夢見て一子を生り。その後又虚空をのむと見てまた男子を得たり。さて此母死て後

にかの兄弟出家して、兄をば蓮花坊、弟をば虛空坊といひける。蓮花坊は念佛修行に諸國をめぐり、虛空坊は活僧の風をまねびて、髪を半切て繪がきたる紙衣きて、八尺の檜棒をつき笈をおひ、その中には女を入れ、國々を行めぐり。その宗とする所は、本分の意を示し答る事あたはざる者をば、棒にてた、き殺して通りしと也云々」（此ぼろくの草紙、或是油賣の冊子とも云。明惠上人の作也と云傳へたり。或說云「寛永の比かとよ。鐵心空道とかや聞えし二人の惡僧有て、僧とも見えず、俗とも見えず、山伏とも見えず、刀をさし尺八をふき、脊中に薦を負、道路をありき、人の門戸に立て物乞ける。是ぼろくの流れと云。云々」又一說に「今世に虛無僧と云は此ぼろくの流れなるべし。髪を童子の如く切て、はらくとうち散したれば、やがてぼろくとはいふ也。物の散々なるをぼろくと常にも云詞也。それを天竺にも梵論師とて、此方の説經者の如き者ある人は梵志、梵論師などいひし故に、それらが名にも梵志、漢志などつけたるもの有しなるべし。其徒

にして普化禪師の末流などいふは據なし云々」今此等の説によるに、ぼろくは中昔のほどの通稱、こそうは彼薦を負ひてありきし故に呼なせし稱なるべし。かくて髪を半散しける故にぼろくと云といへるも、よしなきにはあらねど今又おもふに、そら婆羅門の流とぞ見ゆる。婆羅門は天竺にて八種の人衆にて、唐に士農工商を四民と云類ながら、佛家の中の武門にていはゆる外道に近き物也。瑜伽論第三「衆有八種。一刹帝利衆。二婆羅門衆。三長者衆。四沙門衆。五四天王衆。六三十三天衆。七夜摩天衆。八梵衆」とある是也。又その作行は、維摩經二方便品左「若左婆羅門。婆羅門中尊。除其我慢」注付曰「廣學問求邪道。自特智惠。驕慢自在。名婆羅門也」肇曰「婆羅門秦言外意。其種別有經書。世々相承以學道爲業。或在家或出家。若行多恃己道術。自我慢人也」これにて見べし。又此婆羅門の梵論師なるは根本説一切有部毘奈耶學事卷八「婆羅門」希麟音義八「不正梵語也。應云沒囉憾摩。此云淨行。或云梵行。

自相傳云。我從梵王口生。獨取梵謂梵論師。世業相傳。習四園毘諦論。例多博智守志貞白。其中聰明穎達者。多爲帝王之師」などあるが如し。又其梵志のいはゆる外道なるは、法華經五安樂行品十四「菩薩摩訶薩。不親近國王王子大臣官長。不親近諸外道梵志尼捷子等」とあるもて知べし。爰に竊に按に、かの蘇我馬子が崇峻天皇を奉り弑、また推古天皇卅七年に、ある沙門が斧を以て其祖父を打殺しける類猶多かるを、たゞ皆佛法の弊とのみ云なれど、佛法の弊にはあらず。彼外道の弊なりしなり。そは皇朝佛法のはじめは、百濟より先づ此婆羅門宗を傳へけるに、此國の眞情にて一旦に執著しつるから、くさんの殺伐多かりしなりける。そもそも廻戸皇子ほどの御方なりければ。

○こやしをねす
「ねやす」
田舎にて糞を熟せしむるをねすとも、ねやすとも云は、令レ粘の意也。

埴安ハシタスと云も、埴粘ハシタヌクなると同じ。ねすとばかり云は、略語也。尚書禹貢に「厥土亦埴墳」とあるを、古訓に「禡延」とあり。史記も同じ。說文に「埴粘土也」とあり。是に准へて知べし。

○こやつ
「やつ」を見よ。

○小弓
異本拾玉、宴遊「秋のいねのをさまるよの嬉しさは春のあそびのまゝ小弓まで」蜻蛉日記「下のはしらにゆひつけたりし小弓の矢とりてとあれば」

○子故に親おろかになる
土佐日記、正月四日

「わすれがひひろひしもせじしら玉をこぶるをだにもかたみとおもはんとなんいへる。をんな子のためかし。

には、おやをさなくなりぬべし」

○御用 元史、鐵哥傳「内府食用圓米。鐵哥奏

曰。計粳米一石僅得圓米四斗。請自今非御用。止給

常米。帝善之」

○こよなく 文には常に多く云て、擧るまでもあらざるを、歌によみたるがめづらしくて、夫木一春、惠慶法師「あら玉の一夜ばかりをへだつるに風のこゝろぞこよなかりける」

○こよみ 三嶋曆 暦也。夫木六、夏、俊成「けふくれぬ夏のこよみをまきかへしなほ春ぞとやおもひなさまし」蜻蛉日記下ノ中「こよみ御覽じて云々同丁「いちはやきこよみにも有かな云々」源氏、

葵「けふよきならんかしとて、暦のはかせめして時とはせなどし給ふほどに」細流云「推古天皇。十二年甲子正月戊午朔。始用曆」榮花花山二「こよみ御覽じて」日用工夫集空華「應安七年三月四日。浴于熱海。蓋三島曆以是日爲上巳」

○こよみの軸 夫木、十八冬源仲正「行としをこよみのちくにまきふせておいはてにける身をなげくかな」

○曆見る事 落窪に、中納言殿の四の君に、大將殿によひとりて、帥殿を聟にとる時の事を云に「四の君こゝにわたし給へと少將にの給へば、暦とりにやりて見給へば、此七日いとよかりけり。何事にかさはらん云々」此ころもはや暦もて吉日を見る事のありしなり。おもふにその以前はたとひ見る事は有るべしとも、其人によりたるにて、なべてのわざにはあらざりしやうにおぼし。

○こより 封じ目に墨つくる 紙捻カヨリを音便に云なり。建武年中行事に「紙ひねりしてむすびて、墨をつく」などあり。封する事なり。

○こらる 「しかる」を見よ。

○こり かりやすぎ たやすぎ 堀離カツラギとかく是也。記傳禊祓の釋曰「禊は身滌にてそゝぐとも、すゝぐとも云て、同じこと也。今も除服などに海川邊に出て清キヨまはり、又許理カケラヂとて、水浴ることするは皆禊の意ばへ也。許理は川降の約まりたる也。堀離字を書は云にたらす。又月事の日數を畢て、清まはるを、伊勢にてかりやすぎともたやすぎとも云。此も過にはあらで、禊なるべし」上已といへり。此說

の如く也。おもふに、佛家に川施餓鬼など云も、此川垢離を少し脩飾せし也。又護摩と云わざは、神事の庭火をうつせる也。かゝるさかひに至りては、神の靈威にますものあらざれば、名を轉じて借用ひたる事多かり。是を以ても佛道と云もの、無益なる事をしるべきなり。

○こりた　物に「こりた」とも「こりぐした」ともいふ、懲の意也。伊勢集に「ひとたびにこりにし梅の花なればちりぬときけど今は見なくに」同、としをへてものいひわたりける人の「たのめつゝあはでとしふるいつはりにこりぬ心を人はしらじなかへし「なつむしのしる／＼まどふおもひをばこりぬかなしとたれか見ざらん」平兼盛集「さき／＼にこりにし君がしひこひをなにわざしにかまたはさせらる」壬生忠見集「いくそたび春の櫻にこりぬらんしばしの色にたのめられつゝ」

○御料人

御料子

京師大坂あたりにてさる

べき人のむすめを指て、ごれうにん様といへり。是は中昔のほどに某ごれうといへりし詞のなごり也。

「御料人」を見よ。

御料とは、もと后がね、聲がねなどのかねと同じく、何の料になるべき人のよし也。さればふるくは男にもいひき。義經記八「かゝりし所に、民部權尉もと泉三郎たゞむね、是ら三人が祖父なりければ、人重んじ奉り、せうの御れうとぞ申す云々」御料子と云も是に准ふべし。或書云「新婦を御料人、幼女を御料子と云は、御寮人、御寮子などあがめて、末部屋住のよし也。家事を姑に詫て、己は關からず、寮に處ゆるにかくは稱すなり。御曹子と云類なり」これも曹は局なりとあり。これもことわりあるやうなれど、彼某御料といへる例多きによるべし。曹子とはひとしからず。

○是にはしかじ　金葉集、戀上、公實「これにしくおもひはなきを草枕たびにかへすはいなむしろとや」

○これはど　萬代、戀二、丹後「つらからぬ心ぞつらきよそにてはいとこれほどのなげきやはせし」

○ころす まぐる 轉物 西土の小説書に
古着を反魂衣とかけり。畿内又江戸にても賊き者の
陰語に、衣服を質物にやることを殺すといへり。お
のづから其心かよへり。又これを曲るともいふは、
十字の下を曲て七とするよしにて、其七は即質の陰
語也。これ又かしこにも轉曲字ありて、其意かよへ
り。

○ころぶ 萬葉二三丁「立者玉藻之如許呂臥者
川藻之如久」とあり。是は自ら臥をいふ。今あやま
ちて倒れ臥すをいふも、是より轉じたるなり。

○こわだか 「こわづかひ」を見よ。

○こわづかひ こわだか 聲様也。竹取物語
に「こわだかになたまひそ」榮花はつ花「いひはて
んほどのこわづかひはづかしきをぞ」源氏少女「こわ
づかひものくしく神さびてよみあげたるほど」野
守鏡序「たゞによみつるこわづかひすこしかれ」古
本忠峯集「山ざとの秋こわ高になくものは妻まどは
せる鹿にぞ有ける」遊仙窟「大語」出雲風土記「大
言」

○こゑがひる 和名抄云「失聲。食療經云。食二

熱膩物勿飲酢漿。失聲嘶咽師說失聲比古裏。

○子をつくる 拾遺集、雜戀「君見ればむすぶ
のかみぞうらめしきつれなき人をなにつくりけん」

○こんがき 紺搔也。拾玉四「紺がきのゑこん
のあさきせどにほしてなによくほどや此世なるら
ん」平家物語「こんがきのさたの事云々」かくとは
染る事也。萬葉七三丁「すがの實を衣爾書付」とよみた
るも、やがて染付と云はんかごとし。日觀集に「梅
の花うすくれなゐの下がきをむらく染る春がすみ
かな」此下がきも下ぞめ也。そめ汁を瓶にいれて、
かきまはして染る故なるべし。

○金剛草履 今も此名あるは、近昔のほどは、
藁金剛、蘭金剛とあるものゝなごり也。金剛はつよ
きよしの名なるべし。奇異雜談一「應仁亂中の事な
るに、東洞院と高倉との間に、足輕一人あり云々。
旅の躰にもあらず。いつも京中を步行かる、躰にて
隔子の紋の帷子に、萌黃のもちの十徳に、藁金剛に
て候ひつる」同「大津坂本にて女人僧を追て、共に
瀬田の橋に身をなげ、大蛇になりし事、婦人其まゝ
走り行、急に走る故に、大蛇になりし事、婦人其まゝ

だしに成てはせて行」

○言語同斷

維摩經九見阿闍佛品十二「不來不

去。不出不入。一切言語道斷」○注肇曰「體絕言經。

生日稍結之也。言以六度。無相爲佛。豈可得以言語
相說之乎」法華經五安樂行品十四には「語言道斷」ともあ
り。

○こんのかたのかた 「めかけ」を見よ。

○こんぶ 昆布也。今の俗に昆布をこぶと云て。
是を祝に用るを、よろこぶの意と物にも釋し、大か
たの人も然かおもふやうなれど、祝に用ひならへる
は廣の意に取て成けり。和名抄に「本草云。昆布和
名比呂米」とあり。さて此名の意は和布荒布等に對
て、やゝ廣きものなれば、廣布のよし也。

○こんめいのしやうじ 「しやうじ」を見よ。

○建立 後漢書三十徐防傳「上疏曰云々。漢承

亂秦。經典廢紀。本文略存。或無章句。收拾缺建立
門經」今これをもの、取立勸進する方にいふは、本
堂建立の方より轉じたる也。かの普請と云が、家造
の事となれると同斷なり。

さ シ 部

○さア

さア／＼

いざさせ

古事記傳

明宮段云「伊邪佐々婆は人を誘ひ起るを、伊邪佐須
麻受留母安須伎西佐米也伊射西乎騰許爾」この伊射
西は伊邪佐世にて、いざ／＼小床にと女を誘へる言
なり。中昔に人を誘ひたつる言に「伊邪佐世賜問」と
云ふと同様」とあり。俗言にさアとも、さア／＼と
も云、皆此いざの省かれるなり。又狂言詞にさアそ
れはなどいふは、然の約れる佐にして、これとはも
とより別言也。混すべからず。築花玉臺に「さゝいま
なん、出侍りつるしばしおはせよ」とあるは、いざ
の伊をはぶけるなるべし。

○西行法師の傳

隱逸傳卷下

不可思議撰とある

は深草元政上人也)曰「西行者武衛校尉康清子。
藤秀郷九世孫也。俗諱憲清。少而讀書習管絃。最
精弓馬。特達三和歌。嘗出奥州仕天仁上皇。每
應制獻三和歌。恩遇日渥。西行素有出樊籠之心。
保延三年終遂志自此周遊天下。文治二年秋偶赴